MIYAMADA・SIMOTANBO・YASIKIZOE－SITES

深山田・下反保・屋敷添遺跡

天然ガスパイプライン（甲府ライン）建設工事にともなう
埋蔵文化財発掘調査報告書

2002.3

帝国石油株式会社
屋敷添遺跡等発掘調査会

MIYAMADA・SIMOTANBO・YASIKIZOE－SITES

深山田・下反保・屋敷添遺跡

天然ガスパイプライン（甲府ライン）建設工事にともなう
埋蔵文化財発掘調査報告書

2002.3

帝国石油株式会社
屋敷添遺跡等発掘調査会

序

本書は、山梨県北巨摩郡明野村内に所在する深山田遺跡、下反保遺跡及び屋敷添遺跡の三ヶ所の遺跡の発掘調査報告書であります。

これらの遺跡群は、山梨県の北西部に位置する茅ヶ岳西麓一帯に立地し、標高はいずれも四百メートル台、山麓西側に流れる塩川がつくりだした河岸段丘上にあります。この茅ヶ岳西麓の明野村内には、縄文時代草創期で著名な神取遺跡をはじめ、弥生時代の下大内遺跡、さらには古墳時代や平安時代、最近では中近世にいたるまで数々の遺跡群が発見され、重要な遺跡の密集地域として注目を集めているところであります。

今回の発掘調査は、ガスパイプライン埋設工事に伴う調査の関係上、ごく狭い範囲が発掘の対象でしたが、上記三ヶ所の遺跡の調査が必要となり発掘調査され、その成果として、旧水田に伴う石垣やフラスコ状土坑などの諸遺構群が検出されました。なかでも、下反保遺跡で検出された縄文晩期～弥生前期の多数の条痕文土器片を伴うフラスコ状土坑は本県でも類例が少なく、条痕文土器を伴う時期の解明にとって重要な資料を得ることになりました。

明野村が位置する茅ケ岳西麓の原始古代社会のあり方は、最近の活発な調査研究によってその様相がかなり鮮明になってきておりますが、今回の調査成果からもその一端をうかがうことができ、茅ケ岳山麓における先人たちの歴史の歩みを探るうえで貴重な資料の一つとなるものと思われます。

最後になりましたが、発掘調査の準備段階から本報告書刊行にいたるまで、地元明野村当局をはじめ事業主体である帝国石油株式会社の各関係各位、また発掘調査や整理作業に携わった多くの方々から多大なご指導やご協力をいただきました。ここに、深甚なる感謝と御礼を申し上げ序といたします。

2002年３月

屋敷添遺跡等発掘調査会
会　長　　萩　原　三　雄

例　　言

1　本書は山梨県北巨摩郡明野村深山田遺跡（明野村小笠原屋敷の内951-４ほか村道７号線）、下反保遺跡（明野村上手字下反保425-３ほか村道250号線）、屋敷添遺跡（明野村上手字早道場1073-1ほか村道250号線）の発掘調査報告書である。

2　本調査は天然ガスパイプライン建設工事に伴い、帝国石油株式会社の委託を受けて屋敷添遺跡等発掘調査会が実施した。

3　調査会組織および本書作成分担は第３章参照。

4　本書の編集、執筆は屋敷添遺跡等発掘調査会の責任のもと櫛原功一が行った。また第６章は新山雅広氏（パレオ・ラボ）が執筆した。

5　発掘調査、整理作業において次の業務を委託した。

基準点測量、調査区範囲図化

㈱シン技術コンサル

炭化種実同定　㈱パレオ・ラボ

6　石器石材鑑定については河西学氏（(財) 山梨文化財研究所　地質火山灰研究室）にご教示いただいた。

7　本書に関わる出土品・記録類は明野村埋蔵文化財センターで保管する予定である。

8　発掘調査から報告書作成に至るまでに以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げたい（順不同、敬称略）。

帝国石油パイプライン建設部・明野村教育委員会・鹿島建設　帝石甲府ライン建設工事甲府事務所・中沢道彦・山路恭之介・深沢裕三・佐藤勝広・大工原豊・鈴木麻理子・㈱パレオ・ラボ・㈱シン技術コンサル

凡　　例

1　遺跡全体図におけるＸ・Ｙ数値は、平面直角座標第Ⅷ系（原点：北緯36度00分00秒、東経138度30分00秒）に基づく座標数値である。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北を示す。

2　遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。

土坑　　1：40
全体図　　任意
土器（復元）　1：4
土器（破片）　1：4
凹石・磨石　　1：3
台石　　1：4
石鏃・剥片　　2：3

3　遺構図版中の斜線網かけは礫断面を表わす。また遺物分布図中の記号は次のとおりである。

・土器　　■石器

4　遺構図版中の遺物接合線については、実線は接合した２点の遺物の接合関係を、破線は接合しないものの同一個体であることを意味する。

5　石器の破線は敲打痕の範囲を、実線は磨り面の範囲を表わす。

6　土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』（1991年度版）を使用した。

7　遺構図版中の遺物番号は写真図版番号、遺物観察表番号と一致している。

8　本書図１は国土地理院発行の1/200,000地勢図、図２は1/25,000地形図を使用した。

本文目次

第１章　調査の概要 …… 1
第２章　位置と歴史的環境 …… 1
第３章　調査に至る経緯と調査経過 …… 2
第４章　調査の方法 …… 6
第５章　深山田遺跡の遺構と遺物 …… 6
第６章　下反保遺跡の遺構と遺物 …… 7
第７章　屋敷添遺跡の遺構と遺物 …… 9
第８章　下反保遺跡１号土坑の炭化種実 …… 9
第９章　調査の成果と課題 …… 9
　第１節　１号土坑出土土器の時期 …… 9
　第２節　晩期末～弥生中期初頭のフラスコ状土坑について …… 10
抄　録
奥　付

挿図目次

図１　深山田・下反保・屋敷添遺跡の位置 …… 2
図２　周辺の遺跡 …… 3
図３　遺跡の位置 …… 4
図４　条痕文期の土坑 …… 14

挿写真

写真１　出土した炭化種実 …… 10

表目次

表１　土器観察表 …… 8
表２　石器・金属器観察表 …… 8
表３　山梨県の条痕文期の土坑 …… 13

図版目次

第１図　調査区全体図（1-1深山田遺跡　1-2下反保・屋敷添遺跡） …… 17・18
第２図　深山田遺跡　全体図 …… 19・20
第３図　下反保遺跡　全体図 …… 21・22
第４図　下反保・屋敷添遺跡　全体図 …… 23・24
第５図　屋敷添遺跡　全体図 …… 25・26
第６図　深山田・下反保・屋敷添遺跡　遺構 …… 27
第７図　下反保・屋敷添遺跡　遺構 …… 28
第８図　下反保・屋敷添遺跡　遺構 …… 29
第９図　深山田・下反保遺跡　遺物 …… 30
第10図　下反保・屋敷添遺跡　遺物 …… 31

写真目次

図版１　深山田遺跡・下反保遺跡　調査状況ほか
図版２　下反保遺跡１号土坑・屋敷添遺跡　調査状況・溝等
図版３　深山田遺跡　遺物・下反保遺跡１号土坑　遺物
図版４　下反保遺跡１号土坑　遺物・屋敷添遺跡　遺物
図版５　下反保遺跡１号土坑　出土土器

第１章　調査の概要

帝国石油株式会社による天然ガスパイプライン（甲府ライン）建設工事に伴い、明野村内では３箇所の遺跡調査の必要性が生じ、「屋敷添遺跡等発掘調査会」による発掘調査が平成12年11月～平成13年１月に行われた。計550㎡の調査の結果、深山田遺跡では旧水田に伴う石垣、ピット等、下反保遺跡では晩期末～弥生前期の条痕文土器片多数を伴うフラスコ状土坑１基、ピット等、屋敷添遺跡では石鏃を埋納した縄文晩期と思われる土坑１基、ピット・溝等が検出された。中でもフラスコ状土坑は山梨県内では類例が少ない資料で、山麓、台地の集落遺跡に伴う貯蔵施設と考えられ、条痕文期の集落立地や生業を考える上で重要な資料である。

第２章　位置と歴史的環境

明野村は山梨県の北西部、茅ケ岳西麓に位置する。釜無川支流の塩川が山麓西側を縁取るように南流することから、茅ケ岳西麓は塩川に向かっておおむね西傾斜した地形を呈している。この塩川左岸地域には塩川が形成した複数の河岸段丘面が形成され、段丘面や山麓斜面を中心に、縄文時代以降、弥生・古墳・中世など各時代の遺跡が豊富に認められる。

明野村内には分布調査等により、今日までに88個所以上の遺跡が確認されている。昭和60年以降、県営圃場整備事業に伴なって埋蔵文化財の調査が本格的に行われるようになり、主に塩川に近い段丘面を中心に調査が進められてきた。圃場整備が終了した現在では、畑地整備事業に伴ない、現集落域よりも標高の高い山麓斜面地域での調査へと移行しつつある。

今日までに調査された代表的な明野村内の遺跡を時代別に列挙すると次のとおりである。縄文時代草創期の神取遺跡（下神取）では爪形文土器等の土器片や尖頭器などの草創期遺物群が出土し、県内では類例が少ない資料として県文化財に指定されている。前期の遺跡には寺前遺跡（上神取）があり、諸磯ｂ式期の集石土坑域を伴なう集落跡が調査されている。中期の遺跡には寺前遺跡、諏訪原遺跡、駒飼場遺跡等があるが、八ヶ岳山麓とは異なり中期末の遺跡が多い傾向にあるという。後期の遺跡には清水端遺跡、屋敷添遺跡があり、屋敷添遺跡では列石等の屋外配石を伴なう集落跡が検出されている。弥生時代では前期末の土器棺を出土した下大内遺跡が著名である。出土した高さ78cmの壺形条痕文土器は県内では復元例としては類例がなく、県指定文化財となっている。古墳時代では方形周溝墓12基が検出された大日川原遺跡がある。約１km離れた神取遺跡の集落域に対する墓域と考えられ、一部貼り石をもつなど、地域的な様相を示している。口を３つもつ三口台付壺も珍しい資料である。また村内には横穴式古墳もいくつか知られている。奈良時代の遺跡は少ないながらも確実に存在し、普門寺遺跡などでは竪穴が検出されている。平安時代には相当数の竪穴や掘立柱建物跡が検出されており、寺前遺跡では竪穴数約110軒、梅之木遺跡（浅尾）では85軒と、爆発的に増加した観がある。茅ケ岳西麓では江戸時代以前、水田には不適な地域であったにもかかわらず、大集落が営まれた理由として牧の存在が指摘されている。甲斐の御牧のうち穂坂牧推定地に近く、これまでに牧の存在を直接的に示す資料は得られていないものの、９～10世紀代に駒引きの盛衰と一致するように竪穴の増減が認められている。隣接する須玉町上ノ原遺跡でも山間地の急斜面に竪穴多数が分布し、緑釉陶器や皇朝十二銭をもつなど、明らかに一般の農業従事者とはいい難い集団の特徴を示している（櫛原・平野1999）。中世になると深山田遺跡（小笠原）から金峰山信仰に関連すると考えられる寺院跡が検出され、13世紀前半以降の高麗青磁や密教関連の仏具である六器等が出土し、話題となったことは記憶に新しい。

今回の調査が行われた深山田遺跡は、明野村小笠原の中央道下り車線側、明野バス停脇にあり、中央道をはさんで東側が平成10年に明野村教委による調査で中世寺院跡、墓地や寺院石垣が検出された調査地区である。中央道南側には甲府ライン予定地となる側道（村道７号線）が中央道に沿って南北に通過し、約40m西側は塩川に落ちる段丘崖となっている。標高は439mである。段丘崖と側道間が圃場整備の終了した水田域で、平成10年に同じ深山田遺跡の一部として調査が行われ、平安時代後半の竪穴３軒等が検出されている。したがって今回の調査区の側道下にも平安時代の遺構が存在する可能性がある。また今回の調査区付近は小字名を「屋敷の内」といい、北側の寺院関連、あるいは土豪屋敷等、中世以降の屋敷の所在を示す地名と考えられる。

明野村上手の下反保遺跡、屋敷添遺跡は深山田遺跡から須玉町方面へ1.3km進んだところにあり、中央道にかかる早道場橋の前後、下り車線側の側道にあたる。両遺跡は、同一側道中の連続した遺跡として設定されているが、今回の調査では便宜的に早道場橋から下る道が側道（村道250号線）と交差する地点の北側を下

反保遺跡、南側を屋敷添遺跡とした。標高は472mである。中央道は、明野村内では塩川に面した低位段丘面の縁に沿って須玉町方向へ北上しており、下反保・屋敷添遺跡付近も深山田遺跡同様、20m西側で塩川へ落ちる急崖となる。

今回調査した下反保遺跡横（1号土坑横付近）の中央自動車道路線内では、昭和48年に中央道建設に伴ない調査が行われている（森本1975）。当時、表面採集では縄文中期土器片、土師器が採集され、本調査が行われたが、遺構は全く検出されていない。出土遺物は縄文土器、凹石、打製石斧で、土器は中期末曽利Ⅴ式のほか、沈線文、縄文をもつ土器、条痕文らしき土器片が含まれている。

今回の屋敷添遺跡調査区の東方、中央道北東側300m付近の現水田面が縄文時代中期末～後期前半、平安時代を主とした屋敷添遺跡で、平成3年に圃場整備事業に伴なって明野村教委により調査が実施されている（佐野1993）。また平成8年にも圃場整備事業に伴ない調査が行われ、平安時代の竪穴2軒、平安末～中世のピット群が検出されている（屋敷添第2遺跡）。側道西側の水田付近では圃場整備に伴なって試掘調査が行われたが、遺構はなく本調査には至っていない。

第3章　調査に至る経緯と調査経過

帝国石油株式会社では、昭和30年代以降、新潟方面

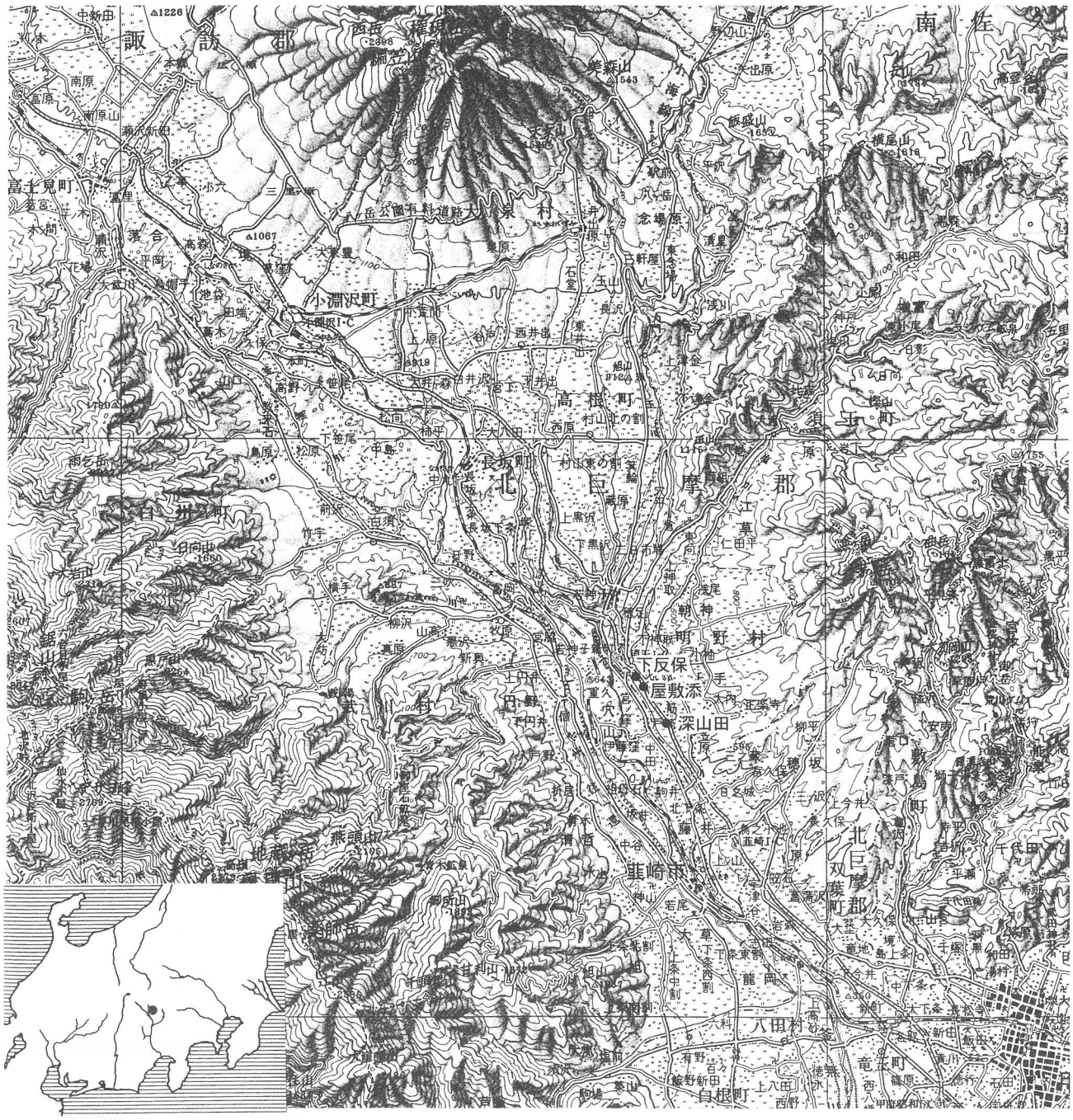


図1　深山田・下反保・屋敷添遺跡の位置

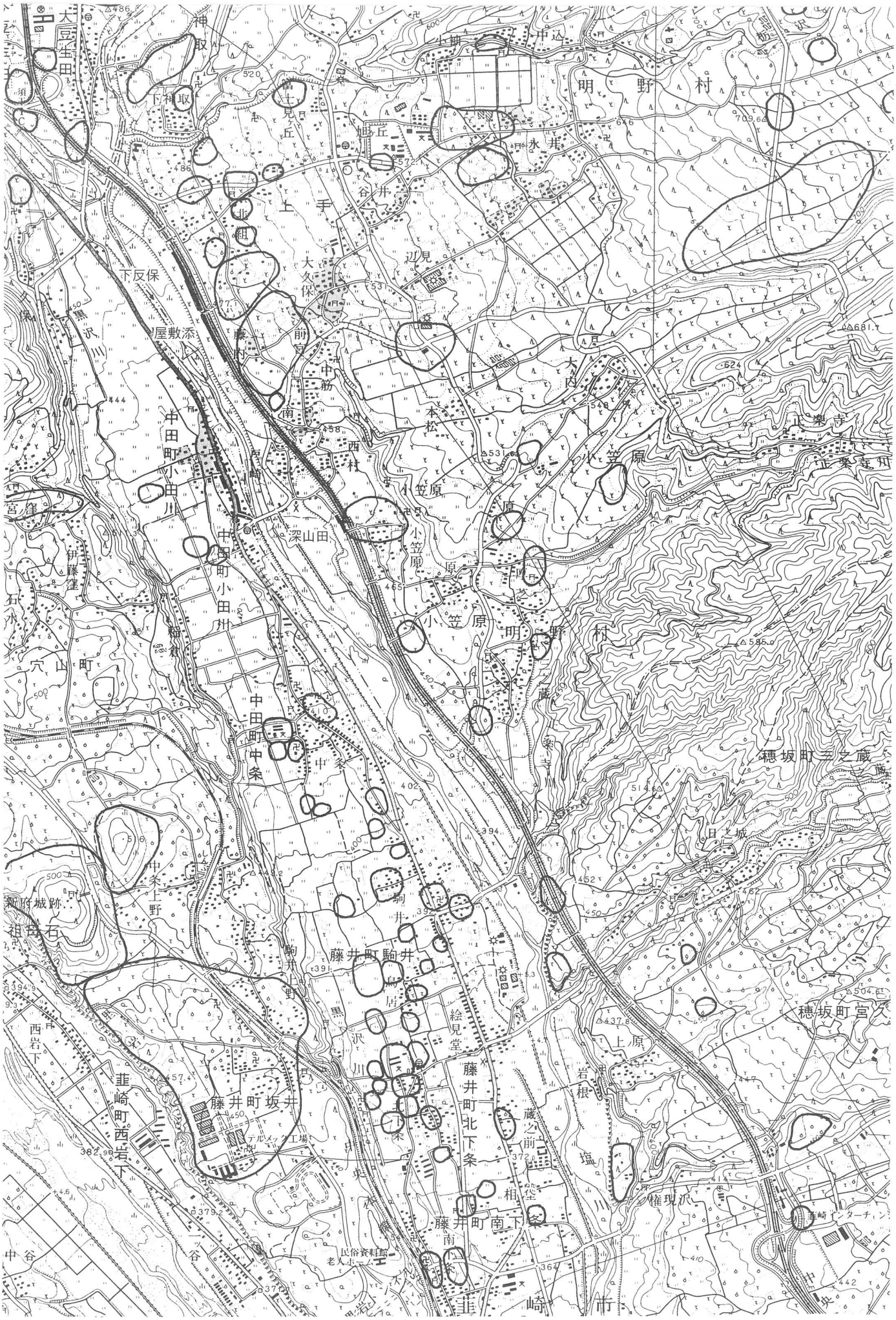

明野村
穂坂町三之蔵
穂坂町宮久
藤井町駒井
藤井町坂井
藤井町北下条
藤井町南下
韮崎町西岩下
韮崎市
中田町小田川
中田町中条
正樂寺
0
1km

図２　周辺の遺跡

一級河川 塩川
桐木橋
下反保橋
北組橋
白滝神社
宇波刀神社
北組
497.7
明野村役場
中央公民館
中央公園
学校給食センター
谷井
明野村総合会館
大久保
下反保
塩
443.5
477.1
早道場橋
三
屋敷添
三嶋神社
水源池
505.5
水稲育苗セン
前宮
JA明野
藤内
浄林寺
中筋
南
461.8
一級河川 沓川
459.3
長清
西村
一級河川 五反田川
戸崎
福性院
村橋
上手駐在所
426.0
沓
深山田
424.9
診療所
上田橋
下畑橋
太い実線―パイプライン
点鎖線　―町村境
0
500m

図３　遺跡の位置

で生産した天然ガスを東京方面へ都市ガスとして供給してきた。平成11年には山梨県内にも天然ガス供給を行うため、天然ガスパイプライン「甲府ライン」の建設が決定され、平成12年から14年に長野県茅野市から山梨県昭和町までの約70kmの区間の予定でパイプラインの埋設工事が行われることとなった。この甲府ラインはおもに中央自動車道の側道を利用し、側道路面中に幅１m、深さ2.1mの埋設溝を掘削、深さ1.5m付近にパイプを埋設するもので、帝国石油側は関係市町村教委に対して平成11年12月に工事の説明を行っている。

明野村教委では村内を通過するパイプライン設置計画に関し、屋敷添遺跡ほか計３箇所における埋蔵文化財の本調査の必要性を指摘された。その後、平成12年秋、帝国石油より(財)山梨文化財研究所に調査業務の依頼があり、研究所では遺跡調査会を組織して委託契約を締結し、本調査を実施する運びとなった。調査会名は３遺跡中最も大きいと予想された屋敷添遺跡にちなみ「屋敷添遺跡等発掘調査会」とした。この調査会には明野村教育委員会職員に参与として加わってもらい、さまざまな指示を仰ぐとともに、帝国石油・屋敷添遺跡等発掘調査会・明野村教育委員会の３者間で「明野村屋敷添遺跡等埋蔵文化財に関する協定書」を交わし、調査全般にわたり地元教育委員会の指導を受ける体制とした。

整理作業は平成13年４月より14年３月まで山梨文化財研究所内で実施した。その中で下反保遺跡１号土坑の土壌水洗選別を実施し、同定を㈱パレオ・ラボへ委託した。

＜屋敷添遺跡等発掘調査会組織＞

会　長　萩原　三雄（(財)山梨文化財研究所　所長）
副会長　鈴木　　稔（　　同　　研究室長）
参　与　佐野　　隆（明野村教育委員会　文化財担当）
調査員　櫛原　功一（(財)山梨文化財研究所 研究室長、調査担当）
調査員　宮澤　公雄（　　同　　研究室長）
調査員　平野　　修（　　同　　研究室長）
事務局員　五味　芳子（　　同　　事務主任）

＜発掘調査参加者＞（順不同、敬称略）

村田せつ子、輿水和彦、蒔田貞雄、入戸野久子、杉山榮常、三井幸子、遠藤勝、笠井いさほ、小林美雪、根岸利昭、入戸野フサコ、望月和仁

＜整理作業参加者＞（順不同、敬称略）

斉藤ひろみ、保坂真澄、岩崎満佐子、田中真紀美、小林小路、彭恵萍、梶原薫、藤井多恵子、広瀬悦子、佐野靖子

＜調査期間＞

深山田遺跡　平成12年11月21日～11月30日
下反保遺跡　平成12年12月４日～12月22日
屋敷添遺跡　平成13年１月９日～１月26日

＜調査日誌抄録＞

平成12(2000)年

11月21日㈫

深山田遺跡の調査開始。午前中、器材搬入。ハウス・トイレ設置。重機により東端から掘削開始。午後から作業員に入ってもらう。旧水田の石垣検出。

11月24日㈮

重機による表土剥ぎは午前中で終了。トレンチ内の精査ほぼ終了。

11月27日㈪

平板実測開始。トレンチ南端の掘り下げ。

11月29日㈬

平面図作成はほぼ終了。

11月30日㈭

写真撮影。シン技術コンサルによる測量。本日でほぼ深山田遺跡の調査は終了。

12月４日㈪

下反保・屋敷添遺跡へのハウス等の移動。重機による下反保遺跡の表土剥ぎ開始。

12月７日㈭

精査をしながらピット確認、断面図作成。

12月８日㈮

弥生条痕文土器を伴う土坑を確認。

12月９日㈯

下反保遺跡の重機による表土剥ぎは終了。

12月12日㈪

平板実測開始。

12月14日㈭

１号土坑設定。調査開始。

12月18日㈪

シン技術コンサルによる測量。

12月20日㈬

掘削作業は本日でほぼ終了。実測のみを残す。

12月22日㈮

１号土坑の調査をほぼ終え、重機によりトレンチの埋め戻しを始める。本日で下反保遺跡の調査は終了。

平成13(2001)年

１月９日㈫

本日より屋敷添遺跡の調査開始。雪かき後、重機による表土剥ぎを開始する。

1月10日(水)

作業員による仕事はじめ。

1月17日(水)

重機による作業は終了。平板実測開始。

1月22日(月)

前日の大雪のため、午前中は雪かき。シン技術コンサルによる実測。

1月25日(木)

午前中で掘削作業は終了。午後からは実測班のみで作業継続。

1月26日(金)

本日で屋敷添遺跡の調査は終了。

第4章　調査の方法

調査区が道路面のため、作業手順としては、埋設溝幅のアスファルトを除去した状態で重機を入れ、土層を観察しながら側道工事に伴う砂利や埋め土を除去し、さらに遺物包含層まで重機で土を除去した。その後、人力で遺構確認面の褐色ローム面まで掘削し、遺物が出土した場合には平板実測、レベルによる計測を繰り返した。遺構確認後、個々の遺構を掘り下げ、必要があれば図面を作成した。土坑・ピットについては半截し、セクションを記録した。条痕文土器が出土した1号土坑については、全点ドットに近い取上げとし、遺構が調査区外へ広がっていたため、一部拡張して調査した。土層観察については数箇所で深掘りし、断面実測を行った。完掘後、1：40での平面図作成、レベリングを行い、整理作業段階でレベルから断面図を作成した。遺構の種類としては石垣、ピット、土坑、溝があり、遺構番号については3遺跡を通しで付けていった。

実測にあたっては道路面に任意に平板ポイントを複数設置して作業を進め、整理段階で調査区範囲測量を業者委託した図面と平板図を重ね、全体図を作成した。またレベリングのためのベンチマークを任意に5箇所設定し、業者委託した基準点測量時に標高値を出してもらった。

側道は盛り土箇所が多く、崩落の危険もあったため、作業にあたっては土留めによる崩落防止対策、夜間や休日におけるネットによる転落防止対策など、通常の発掘現場にはない各種安全対策が求められ、事故がないように細心の注意を払って作業が進められた。

第5章　深山田遺跡の遺構と遺物

長さ64m、幅1mの調査区で、道に沿って緩やかに湾曲する。南側が道路面で標高約439m、北側は標高436.8mで、北側が低く傾斜した斜面となっている。南側の深いところで1.7m、北側の浅いところで60cm掘り下げたところ、旧水田面の床土（ニガ土）となった。酸化した褐色土と地山の礫を含んだ褐色土が混合していたため、遺構確認が困難であった。平安時代から中世の遺構が期待されたが、側道建設以前に存在した旧水田面および石垣が検出されたほか、時期不明のピットが検出された程度で、明確な遺構は見つかっていない。遺物には古代（平安時代）から中世と思われる土師器小破片が少量出土している。

旧水田面は4面あり、南側から1～4号水田とする。1号水田は幅約14m、2号水田は約13m、3号水田は約15m、4号水田は約17mで、1・2号水田間に1号石垣、2・3号水田間に2号石垣がある。2号水田面にごく浅い小ピット群があり、個々に番号を付けていないが、直径10～50cm、深さ5～10cm程度のシミ状のピットである。遺物はなく、遺構と認定することは難しい。3号水田面では中央付近に1号ピットがある。4号水田面には小ピットが4基あり、うち北寄りの1基のみ柱穴状の掘り方であったため2号ピットとした。

1号石垣　幅50cm、高さ60～70cmの礫2個を横に並べたもので、1段の石垣である。礫の一面を割りによって平坦とし、その面を外側へ向け、水田の畦の基底部としている。この石垣によって1号水田面と2号水田面間に約90cmの段差を形成している。1号石垣付近での土層断面図によると旧アマ土直上までが埋土となり、その下の床土以下は水田面造成時の整地層、その下は岩盤状の地山で、遺物包含層は残っていない。

2号石垣　1号石垣ほど明確に石垣としての形態を留めていないが、裏込め石と思われる礫が残り、また東壁側には隣接する水田の石垣と思われる石列状の石垣が露出している。2号水田面と3号水田面の段差は約50cmである。この付近の断面図によれば、1号石垣付近同様に地山層が床土直下にみられ、遺物包含層は存在しない。

1号ピット　直径17cm、深さ17cm。

2号ピット　直径22cm、深さ18cm。ともに遺物はなく時期不明であるが、規模、形態から中近世以降の所産であろう。建物の柱穴とは考えにくく、水田に関わる施設のものかもしれない。

遺物　1は土師器小型甕。口唇部に押圧があり、手

捏ね土器の一種かもしれない。２は凹石で、表裏２面に凹みがある。３はキセル吸い口。Ｌ字に折れ曲がっている。

第６章　下反保遺跡の遺構と遺物

下反保・屋敷添遺跡調査区は全長490m、幅１mの長大、直線的な溝である。そのうち約230m分を下反保遺跡として調査した。調査区北側には小河川が西流し、下っている。また北側は側道造成時の盛土層が厚く、深いところで地山面まで2.1mを計る。中央付近はやや小高く盛り上がり、良好なローム面が存在する。盛土は浅く、路面下90cmで地山面となる。弥生時代の１号土坑のほか、柱穴と思われるピット群が検出された。そのほかの地点でもピットは単発的に見つかっているが、おおむね小規模である。中央付近から南側は路面下1～1.5mで地山となり、また北側と南側には大きな礫が多数露出している。遺物は、１号土坑中からまとまって条痕文土器が得られたほか、陶磁器片が散在して少量存在した程度である。

基本層序は確実に捉えていないが、中央付近で深掘りを行い、地山を掘り下げた（第８図下参照）。それによると１層の旧地表面（耕作土層）下が厚さ10cm程度の暗褐色土（２層）で、遺構確認面となる。その下が地山と判断した黄褐色土層（３層）で、礫を含む厚さ60cmの層である。４層は砂質土となる。

３号ピット　直径22cm×深さ22cm。断面はU字状。

４号ピット　直径38cm×深さ20cm。断面はU字状。

５号ピット　直径58cm×深さ25cm。断面は鍋底状。

６号ピット　直径53cm×深さ31cm。断面は鍋底状で、７号ピットと重複する。

７号ピット　直径48×35cm×深さ９cm。断面は皿状で浅い。

８号ピット　直径70cm×深さ30cm。断面はボール状。

９号ピット　直径30cm×深さ14cm。断面は鍋底状。

いずれのピットも出土遺物はなく、時期は不明であるが、６・７号ピットは１号土坑に近いので、時期的にも関連したピットかもしれない。３・４号ピットは中近世以降の所産か。

１号土坑　調査区中央北寄りで検出された土坑で、断面はフラスコ状を呈する。推定直径は最大幅2.4mで、東・南・北壁は調査区内にほぼ収まっていたが、調査区幅がわずか１mのため、西側は約40cm拡張して遺物を取上げるにとどまり、完全に調査することはできなかった。ただし西壁については40cm先から西側は側道造成時の盛土層となっており、遺構は欠失しているものと思われた。

土坑底面は側道路面下165cmで、路面下60cmは砕石等の盛土層である。その直下が旧水田面のアマ土、床土で約20cmある。床土直下が遺構確認面であり、本土坑の確認面でもある。確認面から土坑底面までは80cm、確認面での標高は約472mである。土坑形態は確認面から約30cm下で壁が奥へもぐりこむ。底面は周縁が深く、真中は盛り上がっているが、全体的にはほぼ平らである。土坑上端付近の上部構造は明確ではなく、南側の立ち上がりが比較的良好に遺存するものの、ほかは崩れた状況を示している。

覆土は大きく３層に分けられる。３層（黒褐色土）・４層（暗褐色土）・６層（褐色土）で、ほかに壁体崩土と考えられるブロック状の５層（黄褐色土）が堆積する。

遺物は３・４層中に集中し、それ以外では散在的である。とくに拡張して掘った西側では、３層下層から条痕文の大型片が同一レベルで平らに並べたように出土し、注意すべき出土状況を呈していた。いずれにせよ、覆土中位から、平面的には南西寄りに直径１m程度の範囲で集中している。条痕文土器を主体とするほか、打斧片、礫やフレイク類が混じる。フレイク類は計８点で、黒曜石７点であるが、それ以外に赤鉄鉱１点があり、注目される。土器は整理段階で接合関係をみたところ、上下で土器が接合した事例は少なく、横方向の接合が大半であった。

遺物　４～34が下反保遺跡出土で、そのうち４～32が１号土坑出土資料である。４は条痕文壺形土器の頸部付近の破片で、横断面の約半分ほどの大型破片に接合することができた。外面は横位条痕、内面は頸部上半が横位条痕、下半はナデである。頸部径は26.5cmあり、胴部最大径は60cmを超えるかと思われる大型品で、下大内遺跡出土例に類似すると考えられる。５・６は深鉢底部。５は外面に細線文の縦位条痕文上に雷文と思われる沈線文が垂下する。底部は網代痕である。６は外面に縦位条痕文をもち、底部は木葉痕である。７～14は口縁部。７・８は口縁部に縄文帯をもつ平縁、角口縁の壺形土器で、７は縄文帯直下に条痕文を縦位施文する。口縁は平縁であるが、一部小波状に隆起する。８は縄文帯直下を無文帯としている。９は内湾、内側折り返し口縁の鉢？形土器。無文で、整形は粗い。10・13は口縁部に平行沈線をもつ丸口縁、平縁深鉢形土器で、10は２本、13は３本の沈線文をもつ。11・12は波状口縁の鉢形土器で、角口縁である。外面はミガキが丁寧で、精製土器の一種と考えられる。11には補修孔が貫通する。14は混入と考えられる堀之内式土

( )は復元値

図版	地点	番号	種別	器種	口径cm	器高cm	底径cm	内面	外面	底部	焼成	色調	胎土	注記	残%	備考
9	深山田	1	?	甕	(12.0)	−	−	ナデ	ナデ	−	不良	鈍い赤褐	粗,石・長・赤	ミ№9	−	内面黒変
9	下反保1土	4	弥生	壷	−	−	−	横位条痕・ナデ	横位条痕・ナデ	−	やや良	明赤褐〜黒褐	粗,石・長・雲・赤	1土№101・143・162〜168・172・173・175	−	幅5mmの荒い条痕,内外面一部黒斑
9	下反保1土	5	縄文晩	深鉢	−	(9.8)	−	ナデ	横　削り・細密条痕・稲妻文	網代・削り	良	鈍い褐	やや粗,石・長・黒	1土№111	−	底部灰付着
9	下反保1土	6	弥生	甕	−	(11.0)	−	ナデ・削り	縦位条痕	木葉痕	良	内-暗褐,外-橙	やや粗,石・長・赤	1土№136	−	底部灰付着,内面黒変
9	下反保1土	7	弥生	深鉢	−	−	−	削り	波状口縁・縄文(RL)・ナデ・条痕	−	良	鈍い赤褐	やや粗,石・長・赤・白・黒	1土№34	−	内面黒斑
9	下反保1土	8	弥生	深鉢	−	−	−	ナデ	縄文(RL)・ナデ	−	良	褐灰	やや粗,長・白・黒	1土№77	−	内外面黒変
9	下反保1土	9	?	鉢?	−	−	−	ナデ	ナデ	−	やや良	明赤褐	やや粗,長・雲・赤	1土№107	−	折り返し口縁
9	下反保1土	10	縄文晩	深鉢	−	−	−	ナデ	沈線・ナデ	−	良	鈍い褐	やや粗,石・長・赤	№146	−	
9	下反保1土	11	縄文	鉢?	−	−	−	ナデ	ナデ	−	良	鈍い橙	やや密,長・角・黒・赤	1土№40	−	焼成前貫通孔,波状口縁
9	下反保1土	12	縄文	鉢?	−	−	−	ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	−	良	鈍い赤褐	やや粗,石・長	1土№127	−	波状口縁,赤色のツヤ
9	下反保1土	13	縄文晩	深鉢	−	−	−	ナデ	沈線・ナデ・ミガキ	−	良	灰黄褐	やや密,角・白	1土№176	−	内面変色
9	下反保1土	14	縄文後	深鉢	−	−	−	ナデ	刺突文・沈線文	−	良	鈍い橙	粗,石・長・スコリア	1土№102	−	堀之内
9	下反保1土	15	弥生	壷?	−	−	−	ナデ	横〜斜位条痕	−	良	鈍い褐〜褐	やや粗,石・長・赤・白・黒	1土№59・61・63・154	−	内面黒斑
9	下反保1土	16	弥生	壷?	−	−	−	削り・ミガキ	斜位条痕	−	良	内-暗褐,外-鈍い赤褐	やや粗,石・長・安・赤	1土№42・58	−	
9	下反保1土	17	弥生	壷?	−	−	−	削り・ミガキ	横位条線	−	良	暗褐	やや粗,石・長・黒	1土№64	−	
9	下反保1土	18	縄文晩	深鉢	−	−	−	ナデ・ミガキ	縦位細密条痕・稲妻文	−	良	灰黄褐〜褐灰	やや粗,石・長・黒	1土№169	−	内外面薄く黒変
9	下反保1土	19	弥生	深鉢	−	−	−	ナデ	竹管条痕	−	不良	鈍い橙	粗,石・長(大)	1土№41	−	
10	下反保1土	20	縄文?	壷?	−	−	−	ヘラミガキ	沈線間に縄文(R?)・ミガキ	−	良	内-灰褐,外-赤褐	やや密,長・角・白	1土№83	−	内面変色
10	下反保	33	縄文前?	深鉢	−	−	−	ナデ	ナデ	−	やや良	鈍い橙	やや粗,繊維・黒	№105	−	

表１　土器観察表

図	地点	番号	分類	長/幅/厚	重さg	材質	色調	注記	備考
9	深山田	2	凹石	10.3/8.2/5.1	420.0	デイサイト	灰白〜灰褐	深山田表採	凹み2面
9	深山田	3	煙管	12.2/0.9/0.8	18.4	銅	緑褐	ミ№7	
10	下反保	21	磨り石	8.5/8.3/5.0	610.0	安山岩	灰	下1土№87	磨り面1
10	下反保	22	台石	18.8/11.4/7.0	1840.0	安山岩	灰褐	下1土№88	敲打痕
10	下反保	23	フレイク	3.7/3.5/1.0	8.8	頁岩	暗灰	下1土№137	
10	下反保	24	打斧?	2.7/2.9/1.1	7.8	頁岩	暗灰	下1土№33	
10	下反保	25	フレイク	2.5/2.6/0.6	2.4	黒曜石	半透明,灰	下1土№93	被熱
10	下反保	26	フレイク	1.6/1.6/0.9	4.2	黒曜石	漆黒	下1土	
10	下反保	27	フレイク	2.4/1.6/1.0	2.4	黒曜石	漆黒	下1土№140	
10	下反保	28	フレイク	1.9/1.8/1.0	3.2	黒曜石	漆黒	下1土№90	
10	下反保	29	フレイク	2.3/2.9/0.8	4.5	黒曜石	漆黒	下1土№52	
10	下反保	30	フレイク	2.7/2.0/0.9	6.0	黒曜石	漆黒	下1土	
10	下反保	31	フレイク	2.3/2.0/0.7	3.8	黒曜石	漆黒	下1土№95	
10	下反保	32	原石	2.4/2.4/1.9	16.0	赤鉄鉱(鏡鉄鉱の可能性)	銀〜灰	下1土№128	金属光沢
10	下反保	34	フレイク	1.6/1.4/0.5	1.0	黒曜石	漆黒	下1№73	
10	屋敷添	35	石鏃	2.9/1.8/0.4	1.4	黒曜石	半透明	ヤシキ№189	

表２　石器・金属器観察表

器口縁部片。15〜20は胴部片。条痕文にも数種あり、浅いもの（17）、深いもの（15・16）、幅広で半截竹管状のもの（19）などがある。20は外面沈線文、内面丁寧なナデをもつ土器で、器種は不明。

21〜32は１号土坑出土石器。21は磨石で表面のみ磨り面となる。22は台石。23は三角形の石鏃形フレイク。頁岩製で、磨製石鏃の未製品の可能性もある。24も三角形を呈するが、打斧片と考えるのが妥当であろう。25〜31は黒曜石製フレイク。定型的な石器はないが、31は石核状を呈す。32は赤鉄鉱（鏡鉄鉱）原石。特に加工はない。単なる混入とは思われず、意図的に何らかの目的で搬入されたのであろう。赤鉄鉱（Fe_2O_3）はベンガラの原料であり、赤色顔料を作るために用意された可能性は大きい。こうした類例は、近くでは高根町内に１例あるほか、群馬県安中市天神原遺跡で晩期の配石中に磁鉄鉱の原石などが集められた事例が著名である。以上のほか、未図化資料として条痕文、沈線文、無文土器の小破片が約70点ある（図版５参照）。

なお、３層から土壌を採取し、炭化種実を回収する

ため水洗選別を実施した。同定報告は第８章のとおりで、トチノキ種子と思われる２片が確認されている。本土坑の性格については現段階では貯蔵穴と考えるのが妥当であり、土坑廃棄後に混入した可能性が高い覆土中層での炭化種実分析の結果をどの程度評価できるかわからないが、トチノミが貯蔵されていた可能性もあると考えるにとどめたい。

33は遺構外出土の無文の繊維土器で、前期前半頃か。34は掻器状の黒曜石製フレイク。

第７章　屋敷添遺跡の遺構と遺物

縄文時代後期前半を中心とした屋敷添遺跡（平成３年度調査）の西縁部にあたるため、縄文時代後期の集落を予想して調査に臨んだが、縄文時代の遺構は２号土坑１基のみであった。そのほか小規模なピット数基、近世以降の畑地境に伴なう地境溝４本が検出されている。出土遺物は縄文土器数点のほか、土師質土器、陶磁器がわずかにある。

10号ピット　直径65×33cm、深さ18cmの楕円形で、断面鍋底状。遺物はない。

11号ピット　直径70cm以上×70cm、深さ34cmの楕円形で、断面ボール状。遺物はない。

１号溝　東西方向の溝で、幅90cm、深さ14cm。溝断面は皿状。２号溝が南側1.3mの位置に１号溝と平行して存在する。遺物はない。近世以降の地境溝か、あるいは１・２号溝を側溝とする道かと考えられる。

２号溝　１号溝と平行する東西方向の溝で、幅40～55cm、深さ９cm。溝断面は皿状。遺物はない。

３号溝　幅2.5m、深さ40cmで、２重の掘り込みを呈す。上層の深さ30cmの掘り方内には長さ45cmの礫のほか多数の小礫が集積している。西側の畑の地境の延長線上にあたるため、近世以降の地境溝と考えられる。

４号溝　幅1.5m、深さ30cmの溝で、断面鍋底状の２重の掘り方をもつ。長さ35cm程度の平石を２列、溝に沿って底面に並べ、暗渠風にしている。礫間からは近世以降の擂鉢、磁器片が数片出土している。３号溝同様、現畑地境溝と一致するため、近世以降の地境溝と考えられる。

２号土坑　1.3m×95cm、深さ14cmの楕円形で、断面皿形。土坑は南東方向に主軸をもち、南東側の床直面から黒曜石製の有茎石鏃１点が出土した。また覆土中には５～15cm大の礫がみられる。35は石鏃で、ほぼ完存する。有茎石鏃は、県内では縄文後期中葉以降に普及するといわれるが、形態から本例は後期中葉～晩期末頃の所産と考えておきたい。平成３年度調査の屋敷添遺跡との関連性はあると思われるほか、下反保遺跡１号土坑とも時期的に関連する可能性がある。

第８章　下反保遺跡１号土坑の炭化種実

新山雅広（パレオ・ラボ）

はじめに

１号土坑３層の土壌を現場にて適当量採取し、整理段階に室内で浮遊水洗選別を実施した。水洗量は5.98ｋg、8.6リットルである。保存用としてビニール袋１袋分を残した。水洗選別後、肉眼および実体顕微鏡下でチェックし、炭化種実を分離して、残滓とともにパレオラボに同定委託をしたものである（櫛原）。

１．試料

下反保遺跡は、山梨県明野村に所在する。本遺跡では、弥生時代前期の貯蔵穴かと思われるフラスコ状土坑（１号土坑）が確認された。試料は、この土坑内埋土から浮遊選別法にて採取された炭化物であり、この中に含まれる炭化種実の検討を行った。

２．結果および若干の考察

検討した結果、炭化物の大半は炭化材の破片であったが、2片のみトチノキ種子の破片かと思われるものがあり、いずれも径5mm前後の破片であった。トチノキ*Aesculus turbinata Blume*種子は、完形であれば、扁平な球形で光沢のある黒色の部分と光沢のない黒灰色の部分とがある。種皮は薄くてやや堅く、炭化状態がよいと表面には光沢があり、指紋状の模様がみられるが、出土した種子片は、状態が悪く、指紋状の模様は認められない。土坑は、貯蔵穴の可能性があるので、もしかしたらトチノキ種子が貯蔵されていたのかもしれない。

第９章　調査の成果と課題

第１節　１号土坑出土土器の時期

山梨県内では、近年の調査で縄文晩期終末～弥生中期前半（氷式～条痕文期）の資料が増加しつつあるなかで、中山誠二氏により広域編年との対比によって県内土器群の段階的な変遷観が整理されてきた。1999年には『山梨県史』資料編２が刊行され、編年的位置付けはほぼ確定したといえる。それ以降も資料は増加しつつある。

中山氏による甲斐弥生土器編年では、氷Ｉ式期を弥生胎動期とみなし、甲斐０期とされた。そして全国弥

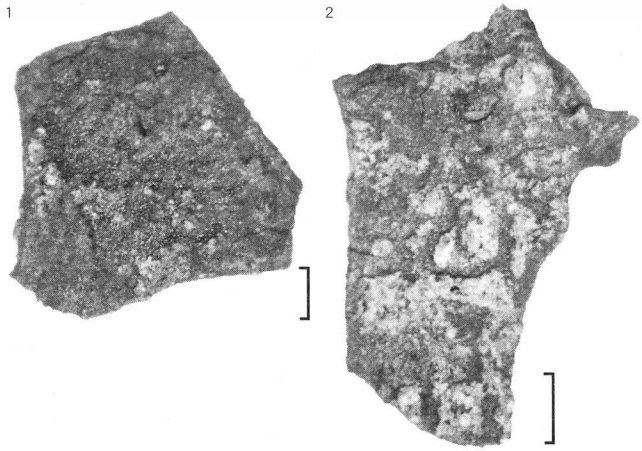


写真１　出土した炭化種実（スケールは1㎜）
1.トチノキ？、炭化種子破片　2.トチノキ？、炭化種子破片

生Ⅰ期に甲斐0-(1)(2)(3)期、甲斐1-(1)(2) 期が併行するとした。全国弥生編年（畿内編年）ではⅠ期は弥生前期、Ⅱ～Ⅳ期が弥生中期、Ⅴ期は弥生後期とされていることから、甲斐0-(1)～1-(2)は弥生前期（併行期）となる。中山氏は甲斐0-(1)期を浮線網状文成立以前として大泉村金生遺跡２号配石、0-(2)期を浮線網状文主体期として韮崎市中道遺跡、0-(3)期を条痕文土器流入期として韮崎市宮の前遺跡Ⅰ期、金生遺跡A17号住などをあげた。1-(1)期は「刈谷原柳坪式」という中部型条痕文土器の成立期とし、柳坪A遺跡16号住、明野村下大内遺跡例をあげている。1-(2)期は条痕技法の装飾化傾向を指摘し、金の尾遺跡例、大泉村寺所遺跡例をあげた。また２期として中道町米倉山遺跡、菖蒲池遺跡例をあげ、条痕文が羽状文、曲線的な波状文、弧状文化するという。

中沢道彦氏によれば、従来の氷Ⅰ式から離山式、女鳥羽川式を分離することができ、続く氷Ⅰ式は３段階（古・中・新段階）に分けられるといい、氷Ⅰ式古段階に長坂町健康村遺跡、氷Ⅰ新段階として宮ノ前遺跡例が相当するとされた。また宇佐美哲也氏によると氷Ⅰ式とⅡ式の間に「氷Ⅱ式直後段階」が設定できるといわれ（註１）、甲斐0-(1)～(3)期で６段階細分案が推定されている。

県内では近年、櫛形町長田口遺跡７号土坑で女鳥羽川式(0-(2)期)の良好な資料が提示されたほか、新居田B遺跡では氷Ⅰ式の稲妻沈線文をもつ細密条痕文土器(0-(2)～(3)期)、および前期末～中期初頭に位置付けられる条痕文土器（1-(2)～2期）が土坑から出土している。須玉町上ノ原遺跡では416号土坑から0-(3)期～1-(1)期と考えられる土器群が出土したほか、564号土坑からは1-(1)期の条痕文土器を伴なう配石墓が検出されている。韮崎市石之坪遺跡東地区ではフラスコ状土坑を主とした土坑群から1-(2)～2期の土器が伴ない、遠賀川系土器壺や岩滑式などの搬入土器が認められている。これらは北巨摩郡～中巨摩郡、すなわち甲府盆地北東部から西部の比較的中部高地寄りの遺跡資料を主とする。これらの分布には偏りがあるものの、こうした資料の増加により甲斐の弥生胎動期の土器の様相は一段と充実することとなった。

では今回の下反保遺跡１号土坑出土資料はどのような位置付けができるであろうか。４およびその他の条痕文土器資料は横位、斜位条痕文を主とし、羽状、波状等は認められない。貝殻条痕ではなく、板材による中部型条痕文と考えられ、口縁部資料はないが明野村下大内遺跡の広口壺形土器に類似するものと考えられる。したがって1-(1)期の様相をもつ。5・18は縦位の細密条痕文土器で、稲妻沈線文をもつことから氷Ⅰ式の範疇として理解できる。稲妻状沈線文は宇佐美氏のいう「稲妻状沈線文B類」（１条の沈線）で、A類（４～５条１単位）より新しいと考えられているため、0-(3)期と考えたい。７・８のような口縁部が角口縁で、縄文帯をもつ条痕文土器としては、県内では類例がないが、氷Ⅰ式の影響を受けた北関東方面の土器に類例があるという（註２）。下反保遺跡が所在する明野村は、山梨県でも東信寄りといえ、群馬県側に近い位置にあることは確かで、何らかの交流を示すものであろう。10・13は鉢または深鉢と考えられる土器である。また11・12も鉢と思われるが、ここには浮線網状文土器は存在しない。以上により、0-(3)期から1-(1)期の資料といえ、縄文晩期終末、氷Ⅰ式新段階から弥生前期の資料と考えられる。２時期の資料が混在するとみなすのではなく、縄文時代から弥生時代への移行期の様相として理解しておきたい。

第２節　晩期末～弥生中期初頭のフラスコ状土坑について

下反保遺跡で検出されたフラスコ状土坑に関し、県内の現状を整理しておく。資料集成にあたっては県史の中山氏による甲斐弥生編年に基づき、氷Ⅰ（甲斐0期）から条痕文期（甲斐２期）までの県内各地の土坑資料をフラスコ状土坑に限らずまとめることとする。なお、土坑を分類するにあたり、フラスコ状（袋状）、円形、楕円形の３大別とし、時期別の形態変遷を探るとともに、土坑の分布状況、遺跡の立地にも注意を払ってみたい。また各種科学分析の成果についても触れることとする。

石之坪遺跡東地区（櫛原2000）

釜無川を見下ろす台地縁辺～台地中央に立地（標高

465m）し、１～２期の土坑20基がある。土坑群は帯状に一部集中して分布し、炉が１箇所存在することから、集落域内に存在すると考えられる。１期12基、２期８期で、うちフラスコ状土坑は９基であり、1期３基、２期６基と２期に増加する傾向がある。また１期でも1(1)期はなく、1(1)～(2)期としたより２期に近いものに多い。土坑規模は大きなもので径２m近いものから２mを超えるものが主で、深さ１m近いものがある。３基に焼土堆積があり（45・123・224号土坑）、うち45号土坑からは骨粉が確認され、再葬墓的なあり方として捉えられている。また45号土坑は焼土面に、内面が赤色塗彩された壺形土器胴下半が斜位に置かれていた。フラスコ状土坑を貯蔵穴と考え、45・56・76・123・127・135・138・230号土坑について浮遊水洗選別による炭化種実の分析を行ったところ、穀類（イネ・オオムギ・コムギ）、堅果類（トチ・ブナ・クリ・オニグルミ等）が検出され、貯蔵穴の可能性が指摘された。

櫛形町長田口遺跡（山下2000）

台地縁辺に立地（標高431m）し、新居田B遺跡とは近接する。７号土坑からは白色粘土塊、磨き石が出土し、土器製作に関わる遺構・遺物と考えられている。

櫛形町新居田B遺跡（保阪2002）

小河川を見下ろす舌状台地縁辺に立地する（標高418m）。当該期の土坑は11基程度存在し、土坑域は２地区に分かれる。晩期末（0(3)期）を中心とする１・２区と２期を中心とする３区に分かれ、それぞれ群集している。前者では円形土坑を主とし、竪穴状遺構１基を伴う。後者では袋状土坑を主とする傾向が認められる。土坑の性格を探るため９・14号土坑でリン酸・カルシウム分析が行われ、14号土坑では動物遺体埋葬の可能性が指摘された。土坑群の性格については、埋葬遺構（土坑墓）とするには壺形土器の出土が少ないことから、貯蔵穴も可能性のひとつとして考えられている。

大泉村寺所遺跡（新津1987）

土坑５基が尾根東側縁辺部に集中し（標高770m）、うち３基が1(2)期に位置付けられている。いずれも円形土坑である。ほかに遺構はないことから居住施設は別にあり、墓域としての性格が考えられている。土坑内出土土器は覆土中から出土したことから副葬品としての可能性があり、土坑は再葬墓または土坑墓と推定されている。

明野村下大内遺跡（佐野1997）

段丘崖に面して土坑１基がある（標高526m）。完形の壺形土器１点を覆うように２個体分の破片などが出土し、再葬墓と考えられている。土器内面底部からわずかに焼土が検出された。土坑覆土炭化材分析でコナラ節が確認され、またリン酸分析も行われているが、リン酸の富化は認められていない。

明野村中村道祖神遺跡（大森1990）

段丘面斜面（標高663m）にあり、土坑１基内から横位に深鉢形土器が出土している。ほかに関連遺構はない。

明野村下反保遺跡

今回の報告例。塩川を望む台地縁辺に立地し、標高は472m。0(3)～1(1)期のフラスコ状土坑で、土器のほかに黒曜石剥片、打斧、頁岩剥片、赤鉄鉱が出土した。調査幅が１mのため、単独か群集するのかは不明である。

須玉町上ノ原遺跡（櫛原・平野1999）

小河川に臨む山麓尾根斜面に立地（標高780m）する。４基があり、20m程度の範囲内にまとまって存在する。いずれも1(1)期と考えられ、フラスコ状土坑はない。C564号土坑は楕円形プランで、配石を伴ない、内部に深鉢形土器を横位に置き、蓋石状の礫を置いたもので、配石墓と考えられている。山中に設定された墓域と推測し、居住域は塩川沿岸方面を想定している。

中道町菖蒲池遺跡（森原1996）

曽根丘陵の丘陵端部、米倉山山頂部に立地する（標高376m）。19基の土坑中、土器が出土したのは13基あり（註３）、それらはまとまって存在する。時期は２期と考えられ、フラスコ状土坑５基、円形土坑８基からなる。前者は径1.4～1.8m、後者は径1.0～2.3mで1.2～1.4mが主となる。つまり円形土坑に比べフラスコ状土坑は径がわずかに大きい傾向がある。６基の土坑でリン酸分析が行われたところ、31・32・34号土坑でリン成分の高さが指摘され、墓坑の可能性が考えられている。とくに31号土坑中の壺内土壌からはより高い結果が得られている。また出土遺物から再葬墓への副葬品的な状況がみられるとのことで、土坑群の性格としては「再葬墓的色合いのある土坑」が含まれるとする見解を示している。

以上、山梨県内の９遺跡56基の土坑を集成した。それらの比較検討を行ってみたい。

遺跡の立地と居住域　集成事例が北巨摩方面の事例が多いこともあって標高の高い立地が多い。９遺跡中６遺跡が台地縁辺、段丘崖など、共通した立地を示している。とくにフラスコ状土坑に限ると、石之坪、新居田、菖蒲池、下反保の４例となり、すべて台地縁辺の立地である。居住域が確実に伴なう事例はないが、石之坪で土坑群中に炉１箇所があり、また新居田Bで

も土坑群に近接して竪穴状遺構が１基存在する。居住域は全く別の場所に存在すると考えられているのが寺所、上ノ原であるが、あえて墓域独立説（居住域・墓域別地点説）を証明する調査例もないことから、基本的には土坑域と居住域は重なると考えるのが妥当であろう。ただ別地点近接なのか、居住域重複なのかは不明である。なお、韮崎市上手沢遺跡は弥生前期の竪穴建物１基が検出された稀有な集落例であるが、傾斜面下の小河川に面した平坦地に立地し、土坑群が存在する立地とはかけ離れている（註４）。

群集と単独　土坑が群集するケースと、広い面積を調査したにもかかわらず１基だけしか検出できなかったケースがある。前者には石之坪、新居田B、寺所、上ノ原、菖蒲池があり、後者には下大内、中村道祖神がある。長田口、下反保については調査面積の制約から判断できないが、現状では単独となる。また群集する場合、少数例（５基以下）の寺所、上ノ原、６基以上の石之坪、新居田B、菖蒲池があり、菖蒲池では13基、石之坪では20基が存在し、遺物を伴なわなかった土坑も含めればかなりの数となる。ただし時期ごとに分解すると１時期数基に減少するので、継続時期の長さと相関するといえる。また新居田Bでは１・２区と３区に土坑群が分かれて存在するが、0(3)期と２期でそれぞれ分かれて分布しており、時期的にまとまりを見せることが明確な事例である。

時期　時期別の形態別内訳は、56基中、0期6基（円形6）、１期22基（フラスコ状４、円形18、楕円形１）、２期25基（フラスコ状12基、円形13期）で、円形土坑そのものは0期から２期まで通して存在するが、フラスコ状土坑は0期には0(3)期の下反保以外にはなく、１期の中でも1(2)期に出現する傾向があり、２期に大きく増加している。したがって0(3)～1(1)期と推定された下反保遺跡例はフラスコ状土坑としては早い出現ということになる。

遺物の出土状況　土器の小破片を中心とした遺物が伴なう例が多い。完形土器が伴なう例は再葬墓とされた下大内、上ノ原にあるのみで、多くは破片状態の混入的なあり方である。そうした中で少数例ではあるが、再葬墓的な土器容器を伴なう事例として、石之坪45号土坑では内面赤色塗彩された壺形土器胴下半が、また菖蒲池31号土坑では口縁部を欠く小型壺形土器が存在する。前者では厚い焼土層とともに骨粉を伴ない、後者では土器内のリン酸値が高いことが判明している。土器以外では黒曜石剥片、石鏃、打斧、赤鉄鉱などがあり、とくに黒曜石剥片は一般的に出土する。土器を含めて副葬品として捉える見方（寺所、菖蒲池）もあるが、黒曜石剥片が副葬品といえるのかどうか、また土坑の性格とどのように関連するのか説明は難しい。

土壌分析　再葬墓、土坑墓を想定して新居田B、下大内、菖蒲池でリン酸分析が行われ、いくつかの土坑ではリン酸値の高さが判明している。またフラスコ状土坑については貯蔵穴を想定し、石之坪、下反保で炭化種実分析が行われ、石之坪では穀類、堅果類が多数検出されている。それらの各種分析を今後も蓄積していくことで、土坑の性格付けが可能となると思われるが、現状では判断はむずかしい段階にある。

土坑の性格　墓坑としての再葬墓説、土坑墓説、食糧貯蔵用の貯蔵穴説がある。特異例としては、長田口例を土器製作関連遺構とする見解が提示され、粘土および土器製作用具類の貯蔵穴としてのあり方が示された。フラスコ状土坑については石之坪45号土坑で焼土層を敷き土器を置くなど再葬墓的な状況を呈していることから本来の機能停止後に再葬墓的な墓坑に転用していることがわかる。本来、フラスコ状土坑には墓坑的な様相は薄いことから、炭化種実の分析を合わせ考えるならば、貯蔵穴の可能性が高いといえる。また円形土坑については、フラスコ状土坑よりも規模の小さなものが多く、フラスコ状土坑とは形態的に区別されることから、機能の違いが予想される。ただし、円形土坑の中には、フラスコ状土坑の壁が崩落して円形として調査された事例が相当数あると思われる。またフラスコ状土坑が集中する付近に存在する事例は、フラスコ状土坑と同一の機能であった可能性が十分に考えられる。1(2)期以降、円形土坑から大型土坑がフラスコ状土坑として分離していった可能性が十分あり、そうした点からも円形土坑とフラスコ状土坑の機能的な共通性は推測される。また新居田B遺跡では晩期末の円形土坑の集中区と、前期末のフラスコ状土坑集中区が別々にあることから、円形、フラスコ状土坑は機能的に同じ可能性がうかがえる。

墓坑との比較　県内で墓坑の可能性が強いと判断された例に下大内の再葬墓と、上ノ原の配石墓があり、ほかに再葬墓と推定される石之坪45号土坑例がある。下大内例は楕円形に近い円形で、土坑底面が平坦ではなく、通常の円形土坑やフラスコ状土坑のように底面が平坦で、平面形が円形のものとはやや異なっている。上ノ原例は楕円形土坑で、大型礫を配して石組みを設けるなど、特殊な事例である（註５）。これらの墓坑関連遺構は、円形、フラスコ状土坑とは平面、断面形態が明らかに異なっている。

まとめ　フラスコ状土坑は条痕文期に特徴的な遺構であり、貯蔵穴の可能性がある。そうした遺構をもつ

	遺跡名	所在地	番号	形態	時期	長軸m	短軸m	深さm	出土遺物ほか
1	石之坪東	韮崎市	37	円	1 (1)	1.45	1.32	0.41	
2	石之坪東	韮崎市	40	円	1(1) ～ (2)	1.20	1.14	0.13	小型鉢
3	石之坪東	韮崎市	45	袋	2	1.46	1.38	0.66	岩滑式,石皿,黒曜石剥片ほか多数,焼土堆積,骨粉,再葬墓か,水洗選別
4	石之坪東	韮崎市	47	円	2	0.90	0.85	0.46	石器,台石
5	石之坪東	韮崎市	56	袋	2	1.75	1.70	0.36	打斧,水洗選別
6	石之坪東	韮崎市	59	円	1 (1) ～ (2)	0.96	0.79	0.17	
7	石之坪東	韮崎市	76	袋	2?	1.94	1.75	0.89	水洗選別
8	石之坪東	韮崎市	77	円	2?	1.62	1.32	0.36	
9	石之坪東	韮崎市	82	円	1 (1) ?	1.11	1.02	0.40	
10	石之坪東	韮崎市	110	袋	1 (2) ?	1.94	1.69	0.24	石器,凹石
11	石之坪東	韮崎市	111	円	1 (2) ?	1.61	1.51	0.33	打斧
12	石之坪東	韮崎市	115	袋	2	1.45	1.24	0.50	
13	石之坪東	韮崎市	121	円	1 (1) ?	0.77	0.71	0.39	
14	石之坪東	韮崎市	123	円	1 (1)	1.68	1.61	0.45	遠賀川系壺,打斧,焼土堆積,水洗選別
15	石之坪東	韮崎市	124	袋	2?	2.47	2.20	0.88	
16	石之坪東	韮崎市	127	袋	2	2.38	1.25	0.97	打斧,凹石等,水洗選別
17	石之坪東	韮崎市	138	円	1 (1) ?	1.20	1.11	0.29	水洗選別
18	石之坪東	韮崎市	162	円	1 (1) ～ (2) ?	1.63	1.00	0.16	
19	石之坪東	韮崎市	224	袋	1 (1) ～ (2) ?	2.06	1.75	0.52	大型打斧
20	石之坪東	韮崎市	230	袋	1 (2)	1.10	0.95	0.40	遠賀川系壺,水洗選別
21	長田口	櫛形町	7	円	0 (1)	1.50	1.27	0.53	打斧,石錘,磨き石、凹石,粘土
22	新居田B	櫛形町	1	円	0 (3) ?	1.17	1.01	0.47	掻器
23	新居田B	櫛形町	2	円	0 (3) ?	1.22	1.22	0.64	剥片
24	新居田B	櫛形町	3	円	2	1.28	1.26	0.54	打斧,磨斧 等
25	新居田B	櫛形町	4	円	0 (3)	1.44	1.32	0.25	磨石
26	新居田B	櫛形町	7	円	1 (1) ?	1.12	1.04	0.58	周溝状凹み
27	新居田B	櫛形町	9	円	2?	1.41	1.32	0.54	土壌分析
28	新居田B	櫛形町	10	円	0 (3) ?	1.39	1.38	0.84	
29	新居田B	櫛形町	11	袋	?	1.56	1.56	0.42	凹石,打斧
30	新居田B	櫛形町	13	円	0 (3) ?	2.02	2.00	1.06	
31	新居田B	櫛形町	14	袋	?	1.60	1.46	1.20	土壌分析
32	新居田B	櫛形町	15	袋	2	1.66	1.46	0.92	
33	新居田B	櫛形町	20	円	2	1.26	1.02	0.50	剥片
34	寺所	大泉村	2	円	1 (2)	1.50	1.45	0.40	石鏃2,土器周辺に焼土・灰集中
35	寺所	大泉村	5	円	1 (2)	0.95	0.60	0.15	
36	寺所	大泉村	6	円	1 (2)	1.15	1.05	0.18	
37	下大内	明野村	225	円	1 (1)	1.24	1.21	0.44	打斧,黒曜石剥片,珪質頁岩剥片,再葬墓か, 土壌分析
38	中村道祖神	明野村	93	円	1 (1)	1.90	1.80	0.55	土器
39	下反保	明野村	1	円	0 (3) ～1 (1)	1.90	1.85	0.80	黒曜石剥片,頁岩剥片,赤鉄鉱
40	上ノ原	須玉町	C416	円	1 (1) ?	1.14	1.10	0.58	
41	上ノ原	須玉町	C558	円	1 (1) ?	1.31	1.05	0.46	
42	上ノ原	須玉町	C561	円	1 (1) ?	1.30	1.20	0.35	
43	上ノ原	須玉町	C564	楕円	1 (1) ?	1.38	1.03	0.45	配石墓か
44	菖蒲池	中道町	2	袋	2?	1.78	1.75	0.48	
45	菖蒲池	中道町	31	袋	2	1.62	1.55	0.28	リン酸分析
46	菖蒲池	中道町	32	袋	2?	1.84	1.67	0.14	リン酸分析
47	菖蒲池	中道町	33	袋	2?	1.48	1.46	0.36	
48	菖蒲池	中道町	34	円	2	1.41	1.39	0.68	石鏃4,打斧,リン酸分析
49	菖蒲池	中道町	35	円	2?	2.31	2.30	0.32	
50	菖蒲池	中道町	36	円	2?	1.38	1.34	0.18	
51	菖蒲池	中道町	38	円	2?	1.10	0.90	0.18	
52	菖蒲池	中道町	40	円	2?	0.98	0.90	0.17	
53	菖蒲池	中道町	44	円	2?	1.60	1.40	0.40	
54	菖蒲池	中道町	79	袋	2	1.58	1.54	0.40	リン酸分析
55	菖蒲池	中道町	80	円	2	1.35	1.20	0.90	リン酸分析
56	菖蒲池	中道町	82	円	2?	1.26	1.18	0.36	リン酸分析

表３　山梨県の条痕文期の土坑

遺跡の立地は、標高の比較的高い台地縁辺部という共通性がある。県内では宮ノ前遺跡水田跡から、水稲が弥生1（2）期には開始していたことが判明しており、一般的には河川流域の低位段丘面を生業の場とし、その周辺が居住域と考えられている。ではフラスコ状土坑をともなう台地縁辺での居住形態をどのように評価すればよいだろうか。堅果類に強く依存した縄文時代以来の伝統的な居住形態、ととりあえず説明しておく。しかし、果たして貯蔵穴の系譜は晩期以前ではどうだったのか考えると、条痕文期にすんなりとつなぐことはできないのである。今後の課題としたい。

今回は県内の事例を集成するにとどまり、全国的な把握は時間的、能力的にかなわなかったが、最後に確認事項、課題を整理してまとめとしたい。

① フラスコ状土坑は弥生前期末（1(2)期）から増加し、中期初頭（弥生２期）に多く認められ、条痕文期の特徴的な遺構と考えられる。下反保例は晩期末に遡る可能性のある事例であり、山梨県内では初現的な事例といえる。

② 遺跡の立地には台地縁辺部を選択するという共通点があり、そうした場所を居住域として選地した条痕文期の居住形態について全国的な視野で眺める必要がある。

③ 晩期末の円形土坑のうち、1(2)期以降に大型土坑がフラスコ状土坑として分化した可能性があり、機能的にも共通するのではないかと考えられる。

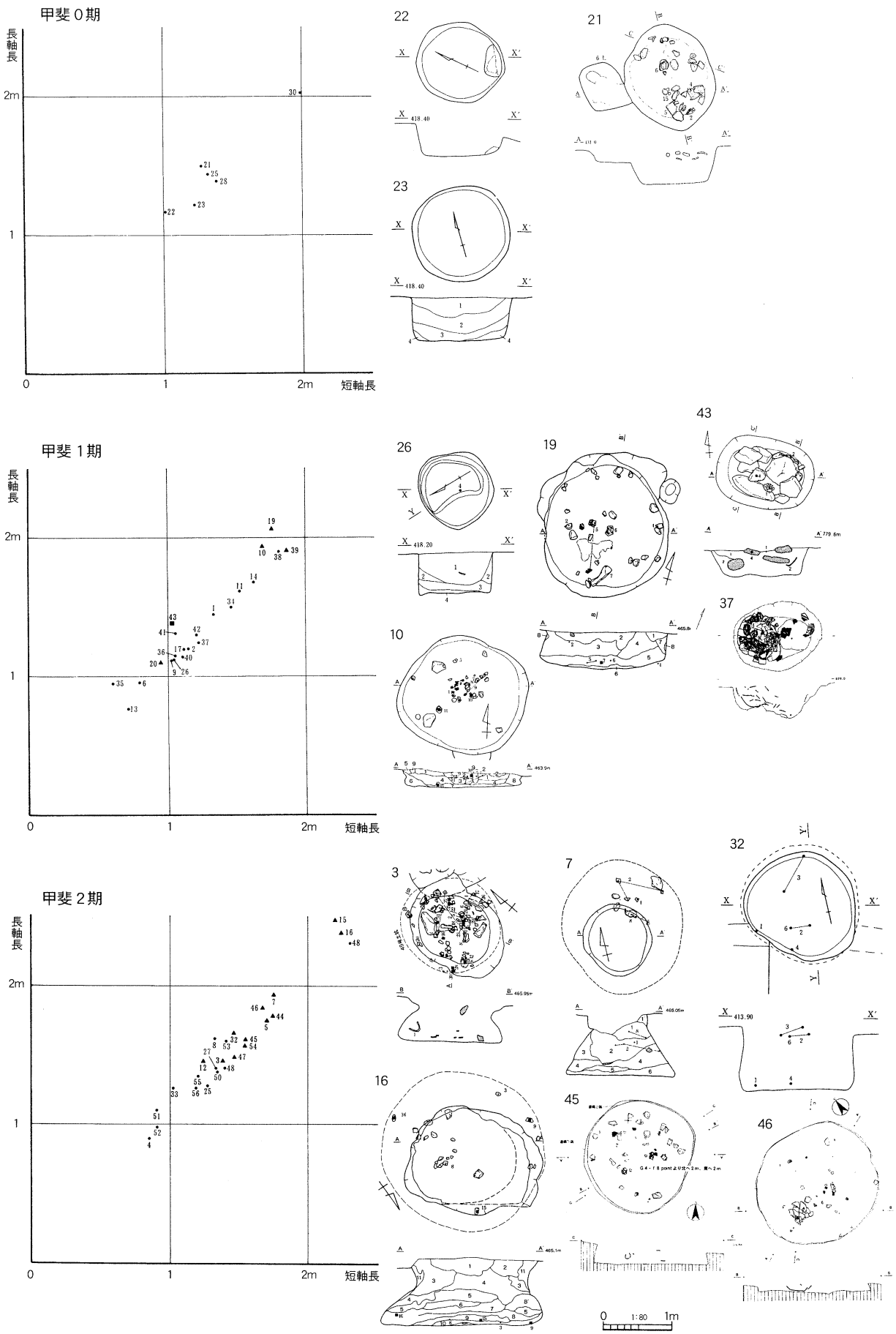


図４　条痕文期の土坑（番号は表３と対応、フラスコ状土坑の長さは底面付近の最大径で計測、・は円形土坑、▲はフラスコ状土坑、■は楕円形土坑）

つまり円形土坑の多くも貯蔵穴であった可能性が推測される。出土遺物からも円形土坑、フラスコ状土坑のほとんどの事例からは墓坑的な様相をうかがうことは難しい。

④ 円形土坑、フラスコ状土坑は群集する傾向がある。本来集落にともなうものと考えられるが、竪穴等の居住施設とどのような位置関係で配されていたのか、などは今後の課題としたい。

⑤ フラスコ状土坑を食糧貯蔵穴と仮定したとき、前期末に貯蔵穴の規模が拡大する点について次のように解釈する。すなわち水田の普及に伴なう各種農作物等の食糧生産の高まりを背景とした食糧備蓄型居住形態において、台地上に適応した貯蔵形態として伝統的な地下式貯蔵法が踏襲されつつ、より規模の大きな貯蔵施設が模索された結果、フラスコ状土坑が出現したと考えておきたい。想像力を飛躍させるならば、生産力に不安のある稲作農耕が展開される一方で、雑穀類などの備荒用作物の保存が重要視されたのではないだろうか。

註1　宇佐美氏によると、氷Ⅱ式は「苅谷原柳坪式」と併行関係にあると考えられるという（宇佐美1998）。

註2　中沢道彦氏ご教示。

註3　報告書では弥生中期の所産と判断された土坑は7基とされる。

註4　報告書は近刊予定。竪穴（15号竪穴）は1(2)期である。ただしフラスコ状土坑は存在しない。

註5　上ノ原遺跡例に近い墓坑に宮ノ前1号土坑（櫛原・平野1992）、三宮地遺跡1号配石土坑（山下1998）がある。ともに無文深鉢を横位に合わせ口にして蓋状におおっているもので、時期的には晩期前半にさかのぼると推測される。それらの系譜を引く墓制である可能性はある。

参考文献

森本圭一　1975「早道場遺跡」『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―北巨摩郡長坂・明野・韮崎地内―』山梨考古学研究会

新津　健　1987『寺所遺跡』山梨県教育委員会

大森隆志　1990『千野木Ⅰ・Ⅱ遺跡　池の下遺跡　踊石Ⅱ遺跡　中村道祖神遺跡』明野村教委

櫛原功一・平野修　1992『宮ノ前遺跡』宮ノ前遺跡発掘調査団ほか

佐野　隆　1993『屋敷添』明野村教委ほか

佐野　隆　1995『村之内Ⅱ・Ⅲ遺跡　高台・中谷井遺跡』明野村教委ほか

森原明廣　1996『菖蒲池遺跡』山梨県教委ほか

佐野　隆　1997『下大内遺跡　屋敷添第2遺跡　中原遺跡』明野村教委ほか

中沢道彦　1998「「氷Ⅰ式」の細分と構造に関する試論」『氷遺跡発掘調査資料図譜』　氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会

宇佐美哲也　1998「氷式土器群の変遷」『氷遺跡発掘調査資料図譜』　氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会

山下孝司　1998『三宮地遺跡』韮崎市教委ほか

櫛原功一・平野修　1999『上ノ原遺跡』上ノ原遺跡発掘調査団

中山誠二　1999「弥生時代の編年」『山梨県史』資料編2

櫛原功一　2000『石之坪遺跡（東地区）』石之坪遺跡発掘調査会ほか

山下大輔　2000『長田口遺跡』　櫛形町教委ほか

山本義孝　2001「中世茅ケ岳山麓の宗教世界」『山梨考古』81　山梨県考古学協会

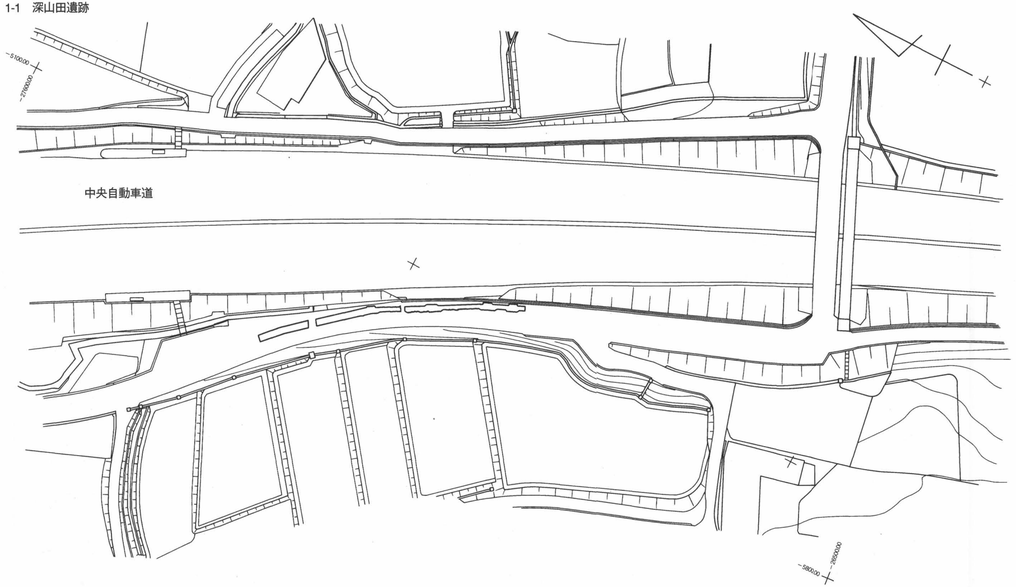
森原明廣　2001「古代の牧と茅ケ岳山麓―明野村の平安時代―」『山梨考古』81　山梨県考古学協会

佐野　隆　2001「茅ケ岳山麓の風土と遺跡」『山梨考古』81　山梨県考古学協会

高田賢治ほか　2001『大日川原遺跡』　明野村教委ほか

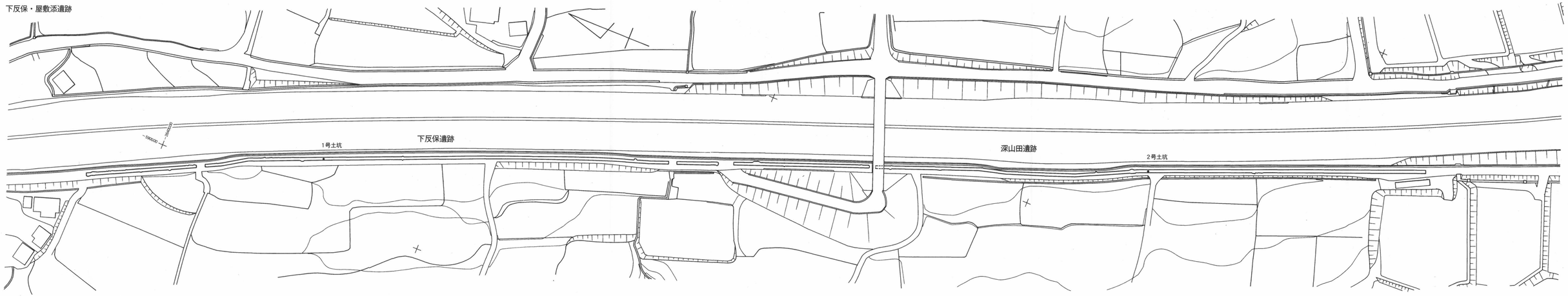
保阪太一　2002『新居田B遺跡』　櫛形町教委ほか

1-1　深山田遺跡

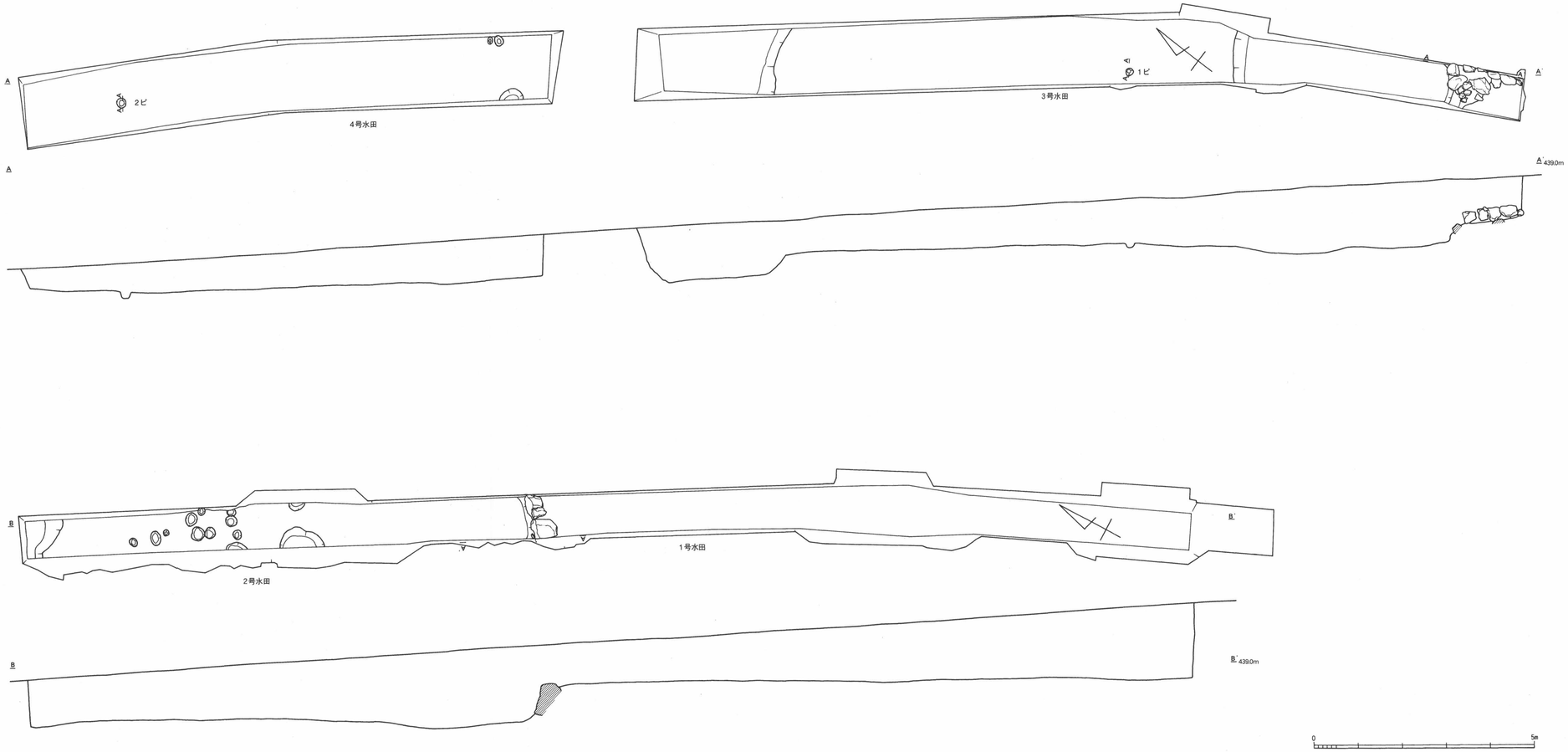


0　100m

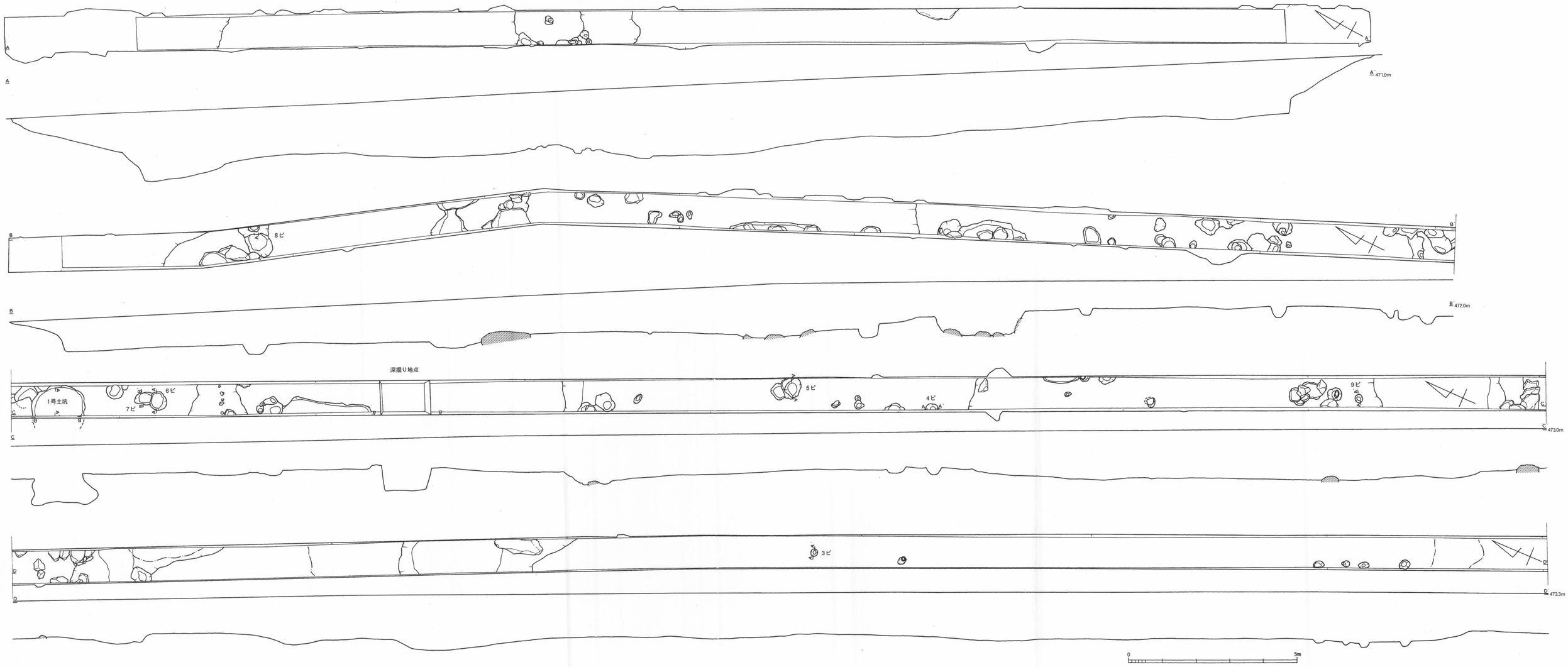
1-2　下反保・屋敷添遺跡



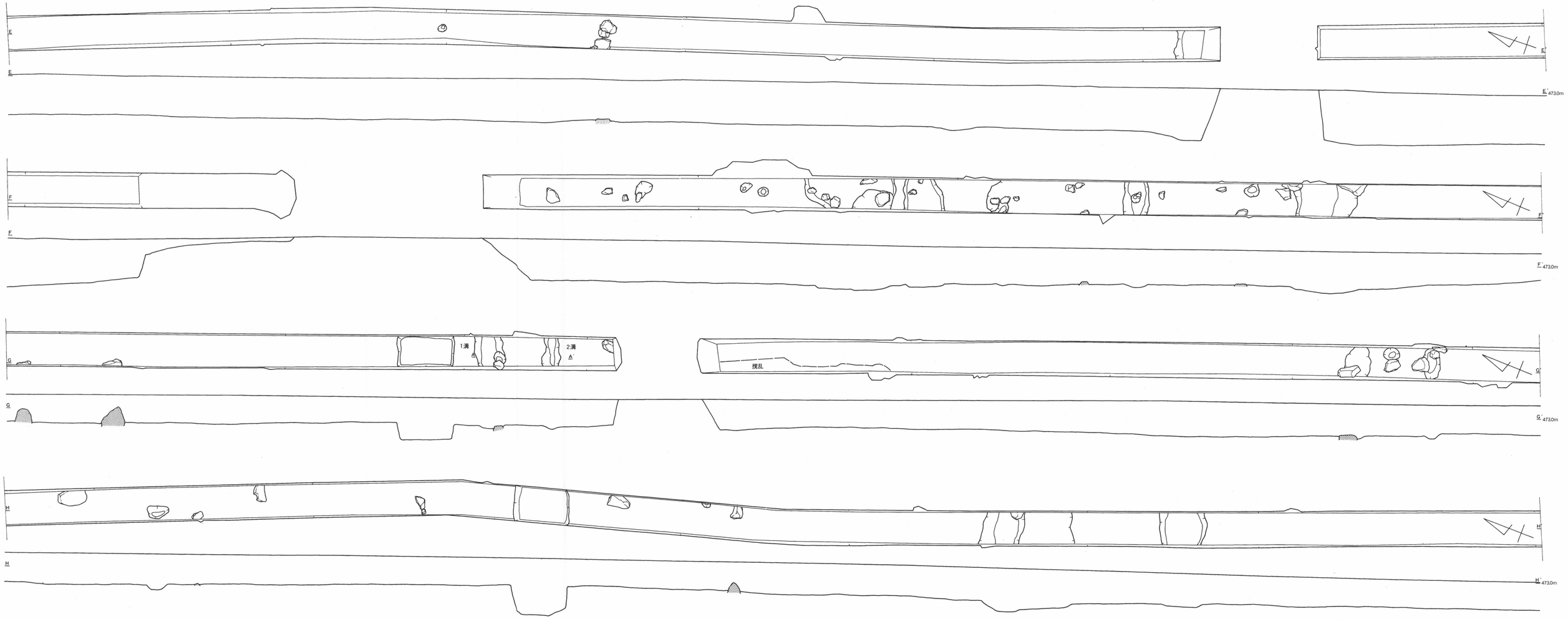
第１図　調査区全体図



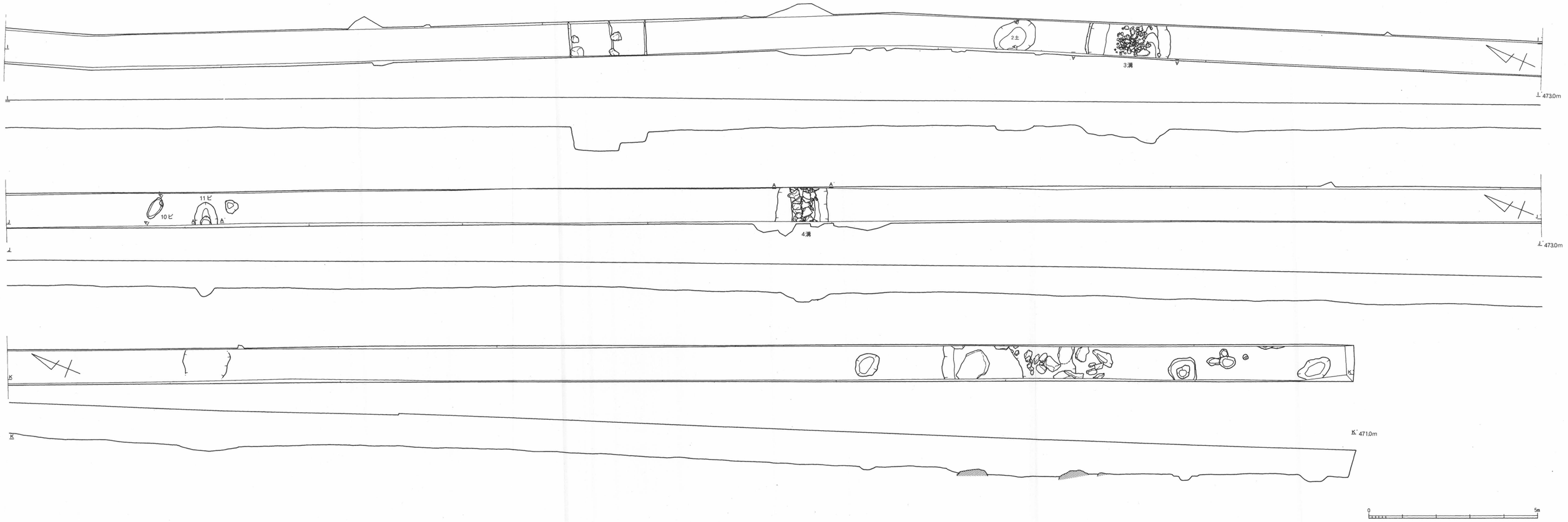
第２図　深山田遺跡　全体図



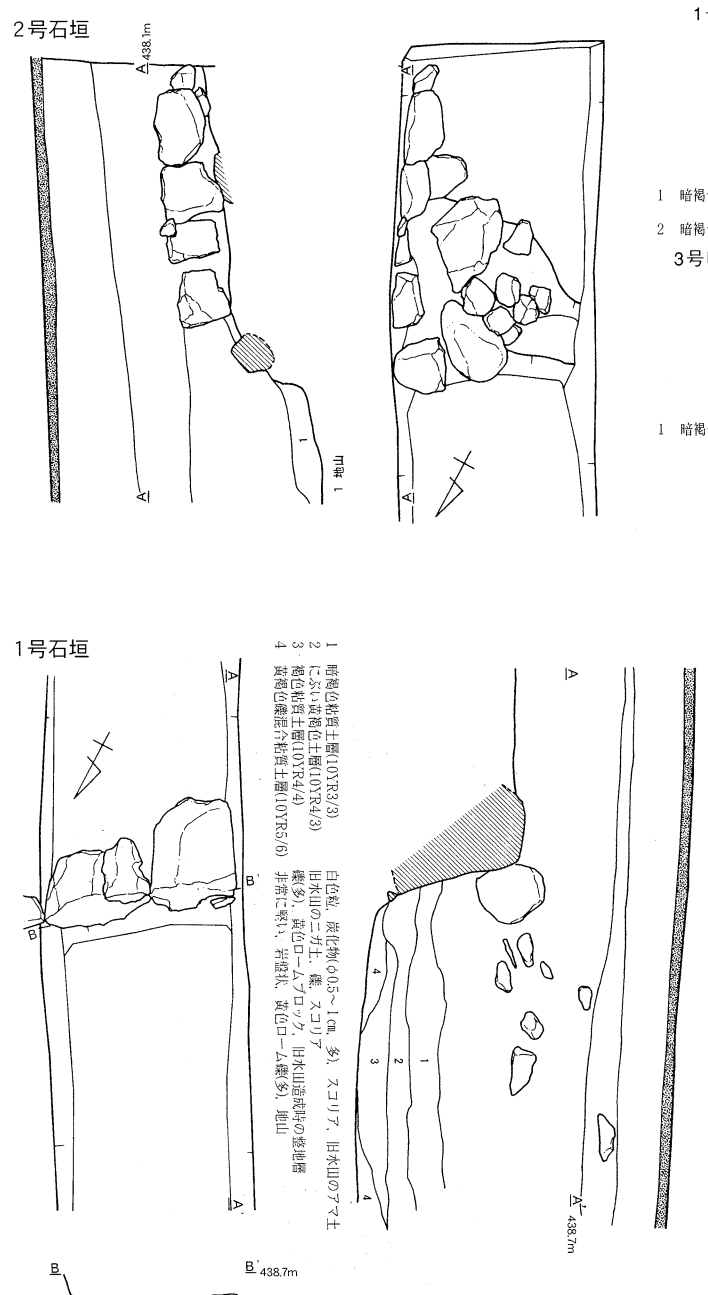
第３図　下反保遺跡　全体図

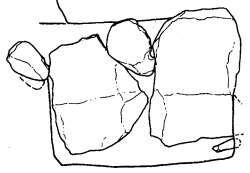


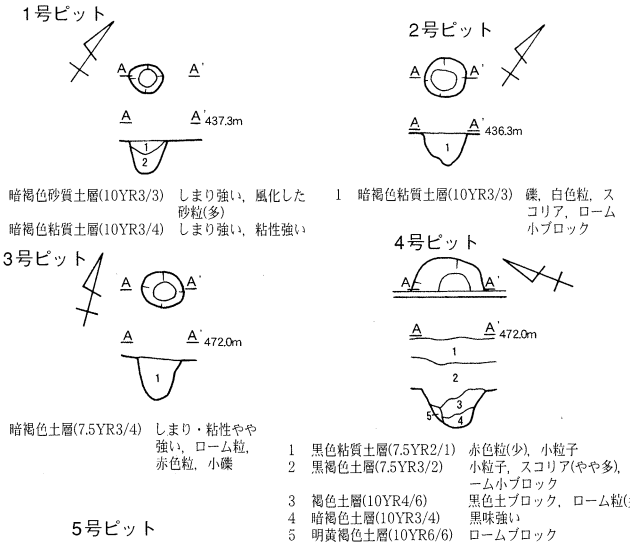
第４図　下反保・屋敷添遺跡　全体図

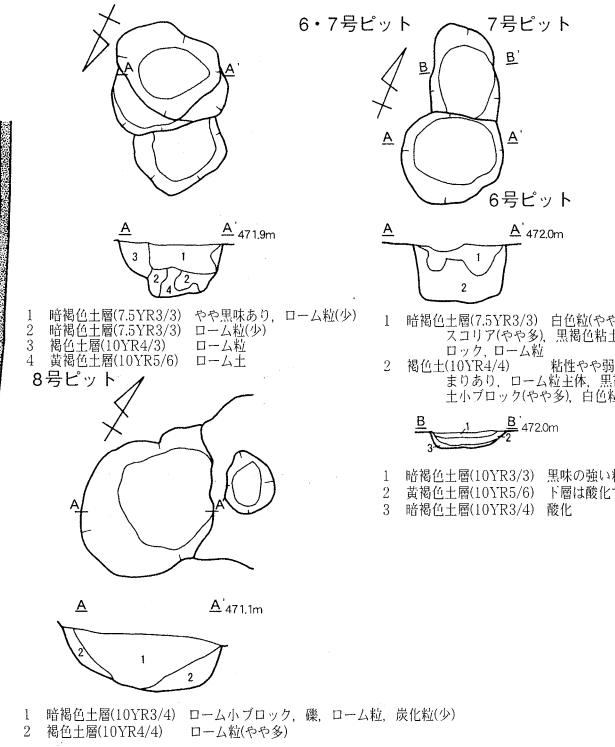


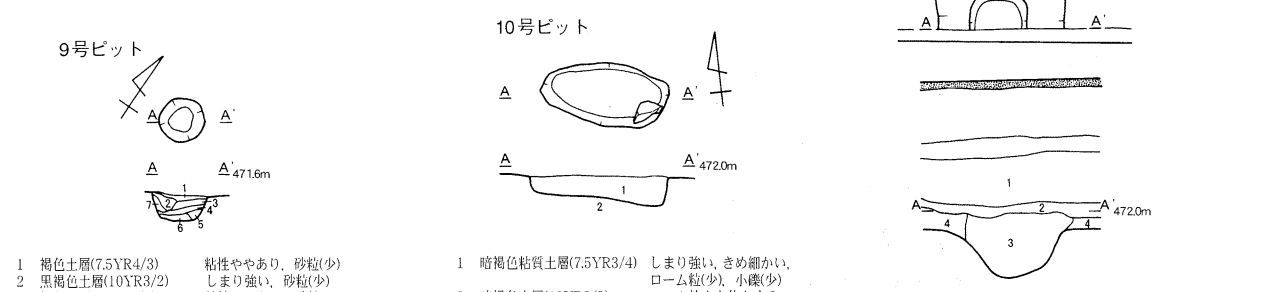
第５図　屋敷添遺跡　全体図





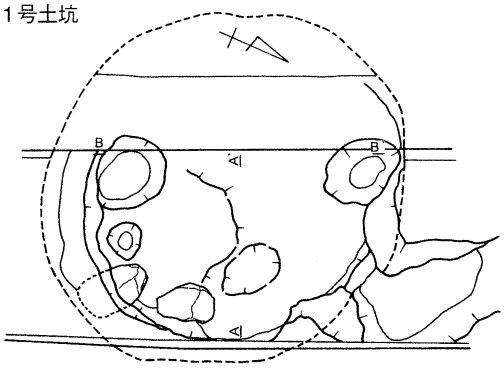


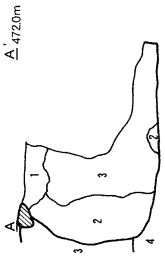




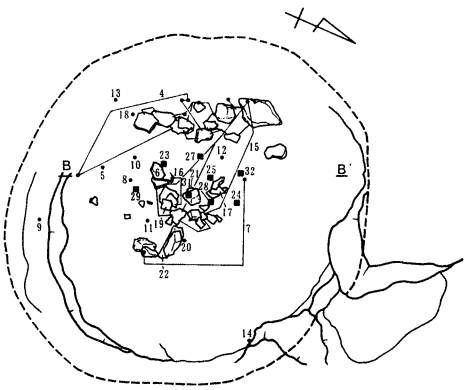
第６図　深山田・下反保・屋敷添遺跡　遺構

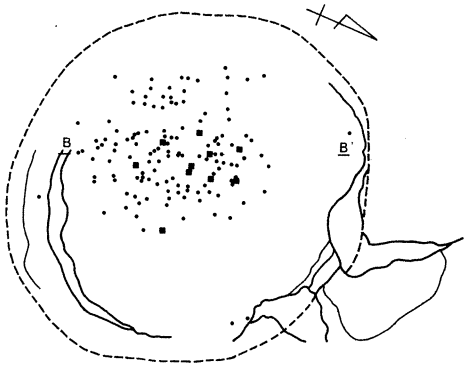
1号土坑

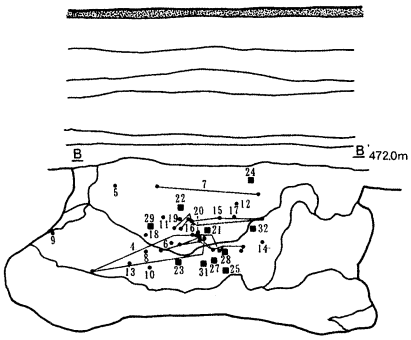


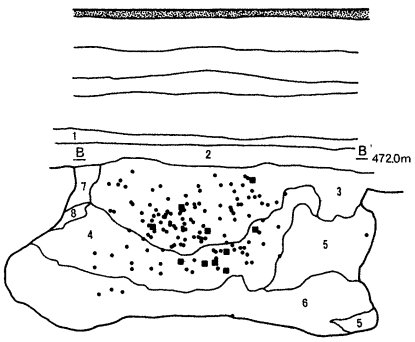


1　暗褐色土層(10YR3/3)　しまりあり，黒色粒，黒色小ブロック(やや多)，ローム粒，黒味が強い
2　暗褐色土層(10YR3/3)　しまり弱い，ローム粒，ブロック，炭化粒
3　褐色土層(10YR4/6)　粘性，しまり強い，ローム，崩落土か？
4　明黄褐色砂質土層(10YR6/6)　礫(多)，表面酸化



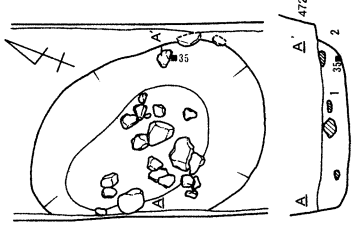




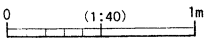


1　黒褐色粘質土層(10YR3/2)　旧水田のアマ土，黒色味強い
2　褐色粘質土層(10YR4/4)　酸化粒，水田のニガ土～旧耕作土面
3　黒褐色土層(10YR3/2)　ローム小ブロック，ローム粒，炭化物(φ0.5cm)多，礫
4　暗褐色土層(10YR3/3)　炭化粒・礫(やや少)，ローム粒(多)，黒色土ブロック，やや黄味が強い
5　黄褐色土層(10YR5/6)　ローム土，黒色土ブロック
6　褐色土層(10YR4/4)　しまりやや弱い，炭化物
7　黄褐色土層(10YR5/8)　ローム土，礫
8　黄褐色土層(10YR5/6)　ローム土，炭化物(1～2cm)，黒色土粒

2号土坑

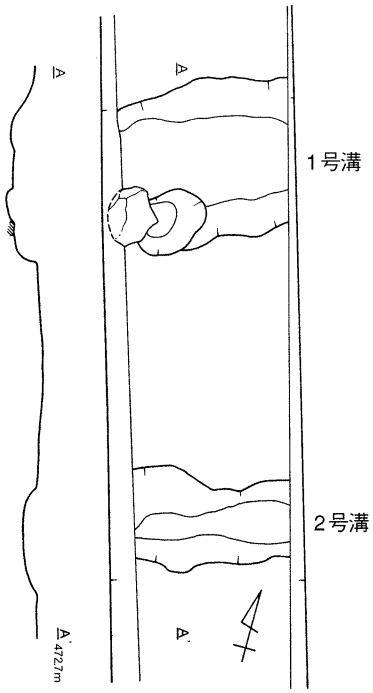


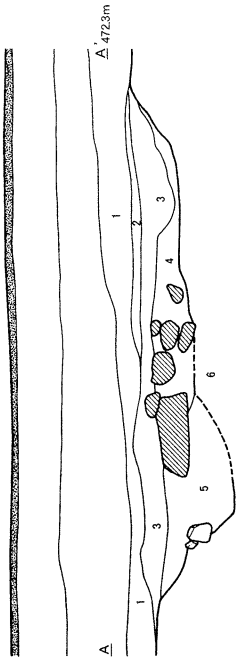
1　暗褐色土層(10YR3/4)　粘性・しまりあり，礫
2　暗褐色粘質土(7.5YR3/4)　粘性・しまり強い，黒色スコリア，小礫



第7図　下反保・屋敷添遺跡　遺構

1・2号溝

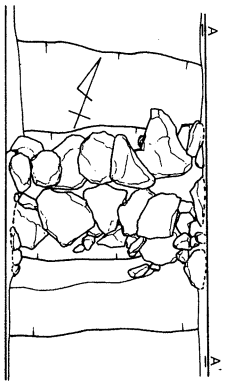




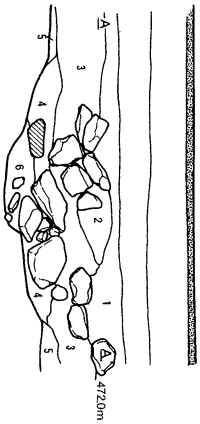
1　暗褐色土層(10YR3/3)　やや灰色味のある土，耕作土層，ビニール混じる
2　褐色砂礫土層(7.5YR4/4)　礫(1～1.5cm，多)
3　灰黄褐色土層(10YR4/2)　粘質土，ローム粒
4　暗褐色土層(10YR3/4)　砂粒(やや多)，中央部に礫(多)，酸化
5　暗褐色土層(10YR3/3)　水が薄く
6　暗褐色土層(10YR3/4)　やや茶味のあるローム土

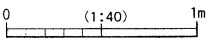
3号溝

4号溝

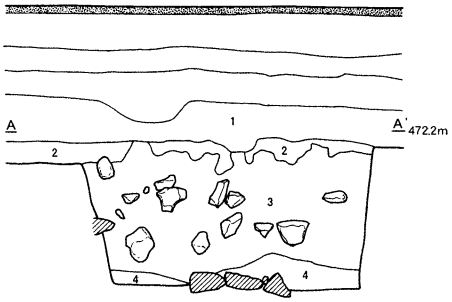


1　灰黄褐色土層(10YR4/2)　小礫含む，田耕作土
2　黒褐色土層(10YR2/3)　しまり強い，黒味強い，表土の一部か
3　暗褐色土層(10YR3/3)　ローム粒(やや多)
4　暗褐色粘質土層(10YR3/4)　砂粒・しまりあり
5　暗褐色土層(10YR3/3)　地山と同質
6　暗褐色土層(10YR3/4)　4層に似る，やや粗，小粒子(多)





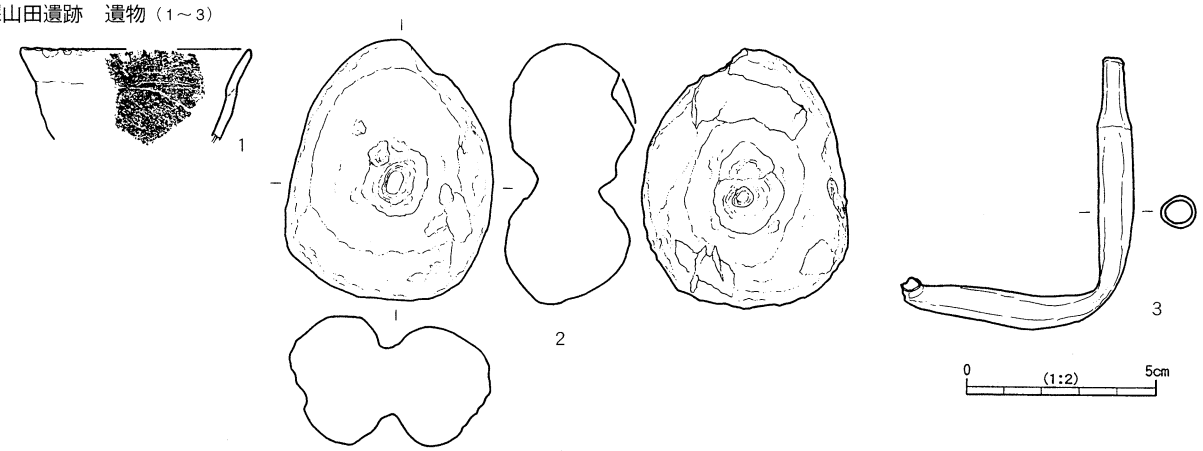
下反保遺跡　深掘り地点　断面図



1　黒褐色土層(10YR3/2)　粘性あり，しまり強い，白色粒，小礫，スコリア，炭化物
2　暗褐色土層(10YR3/3)　しまり弱い，ローム粒，ロームブロック
3　黄褐色土層(10YR5/8)　しまりあり，大きな礫(多)，黒色ブロック(やや多)，ローム粒，ローム土主体，地山
4　褐色砂質土層(10YR4/6)　しまり強い，礫(多)，下層は白味のある砂，上層は黄味の強い砂質土

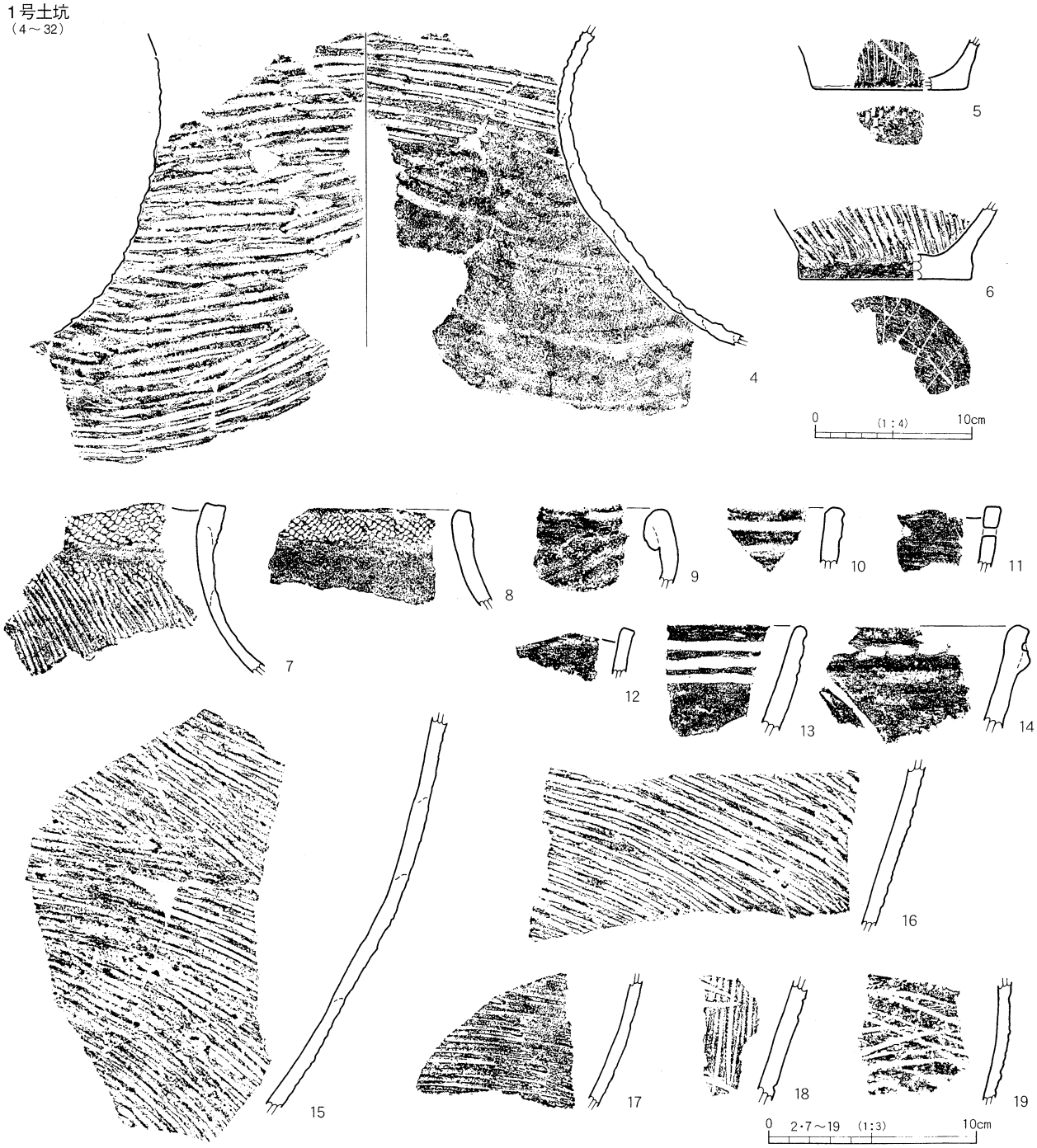
第８図　下反保・屋敷添遺跡　遺構

深山田遺跡　遺物（1～3）

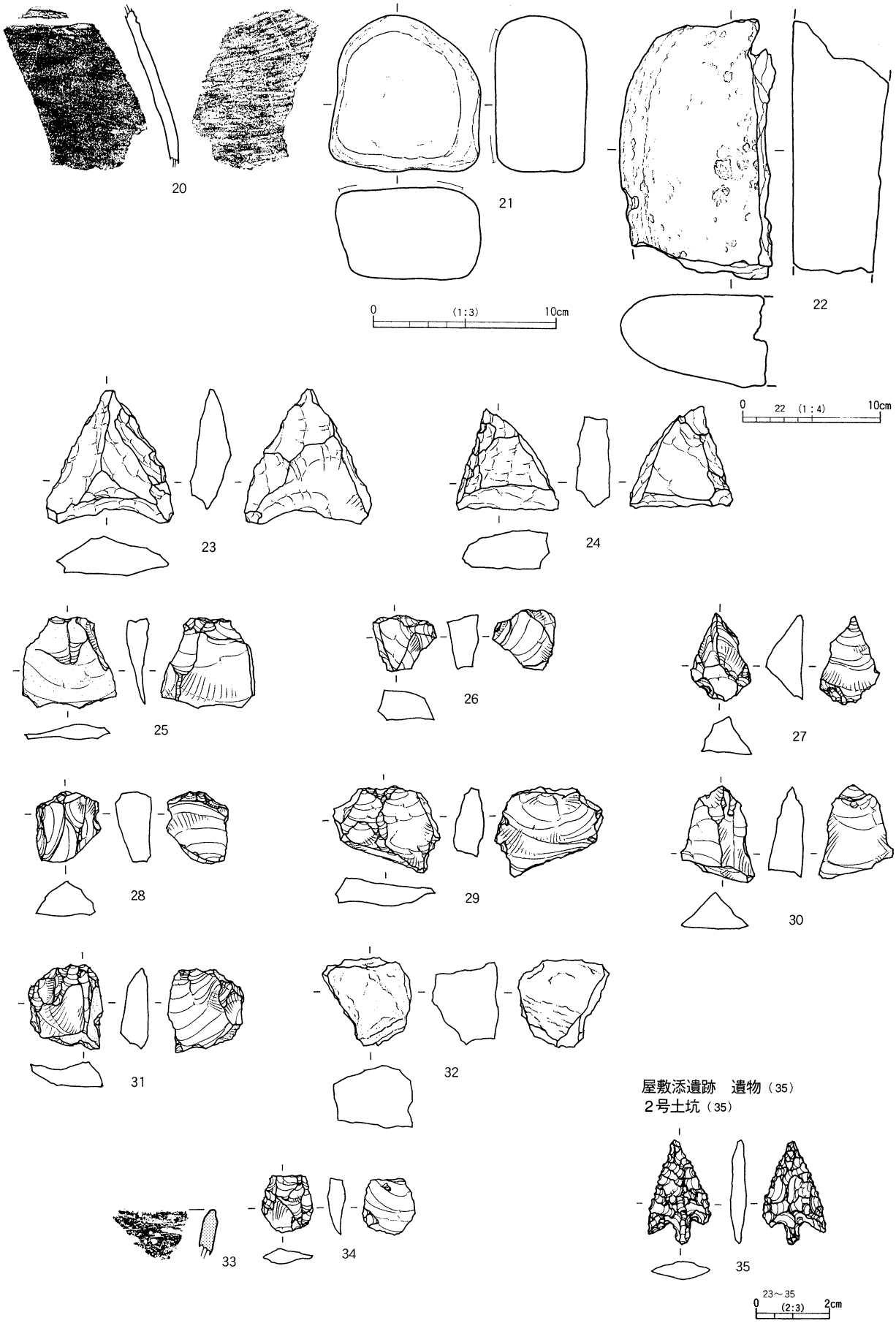


下反保遺跡　遺物（4～34）

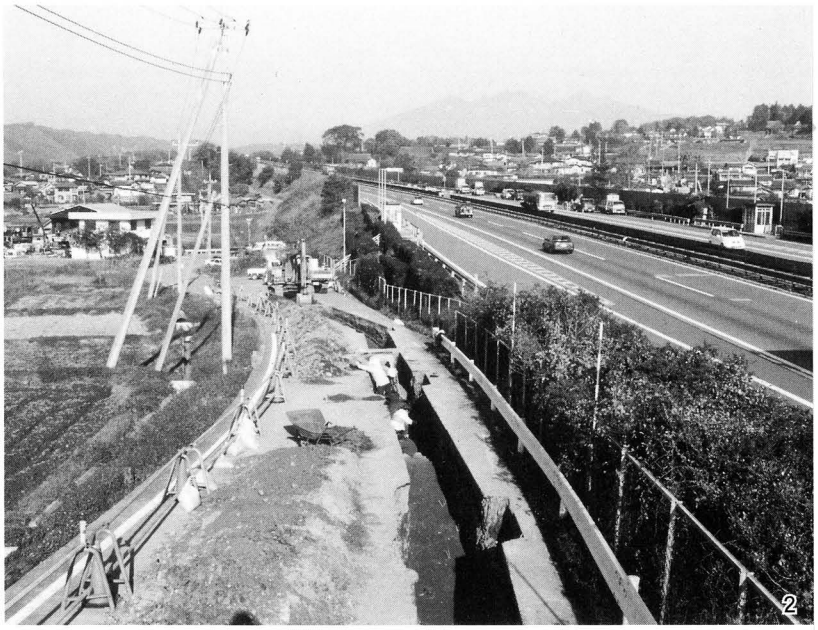
1号土坑
（4～32）



第９図　深山田・下反保遺跡　遺物



第10図　下反保・屋敷添遺跡　遺物

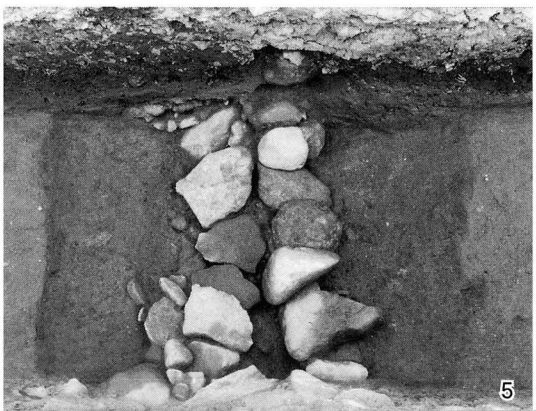


1　深山田遺跡　調査状況
2　　同
3　　同　　旧水田に伴う石垣

4　下反保遺跡　調査状況(1号土坑付近，南から)
5　　同　　(北から)

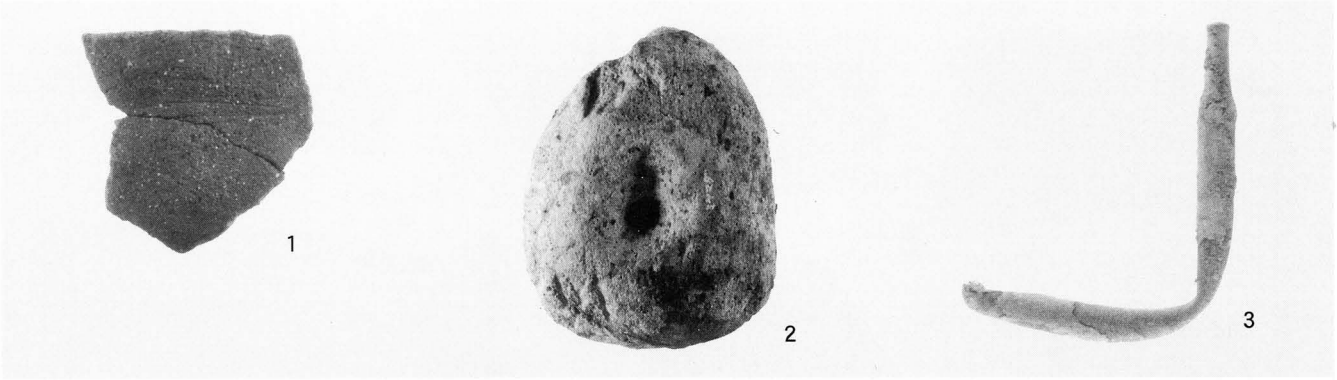
図版 2

1　下反保遺跡　１号土坑　完掘状況
2　　同　　土器出土状況
　　(条痕文土器片が並んで出土)

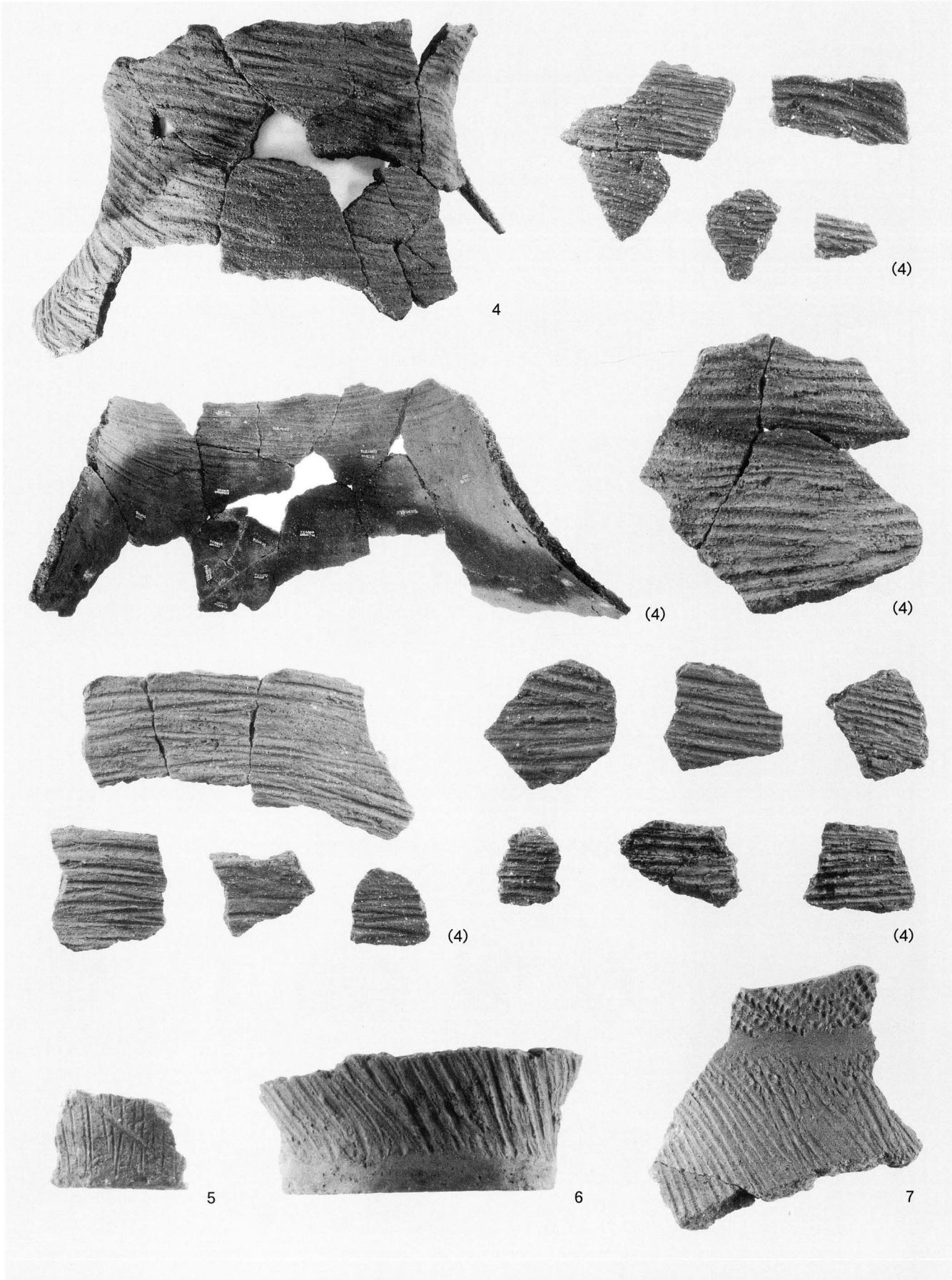


3　屋敷添遺跡　調査状況(南から)
4　　同　　２号土坑　遺物出土状況
5　　同　　地境の石列

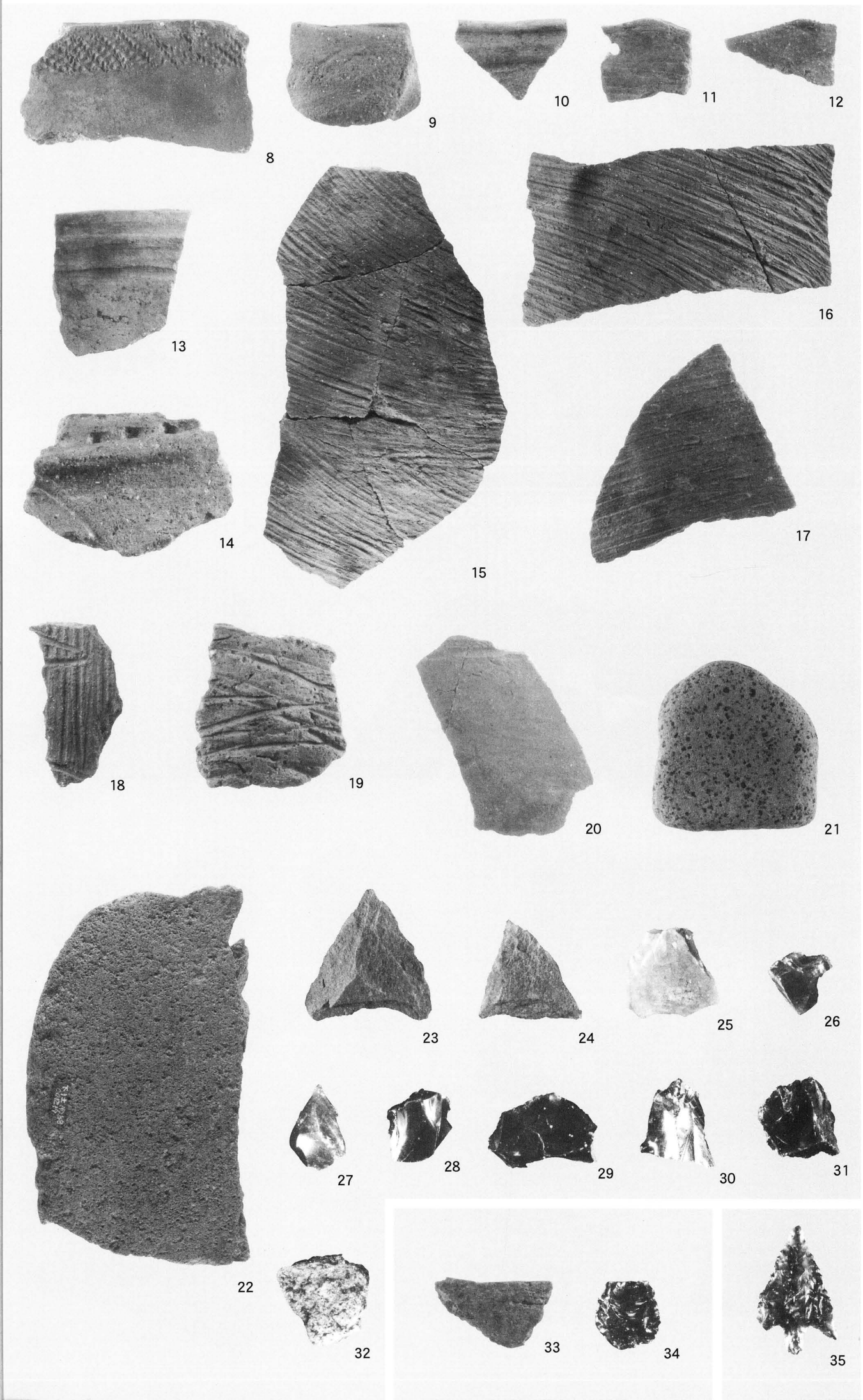
1～3：
深山田遺跡
遺物



4～7：
下反保遺跡
1号土坑
遺物



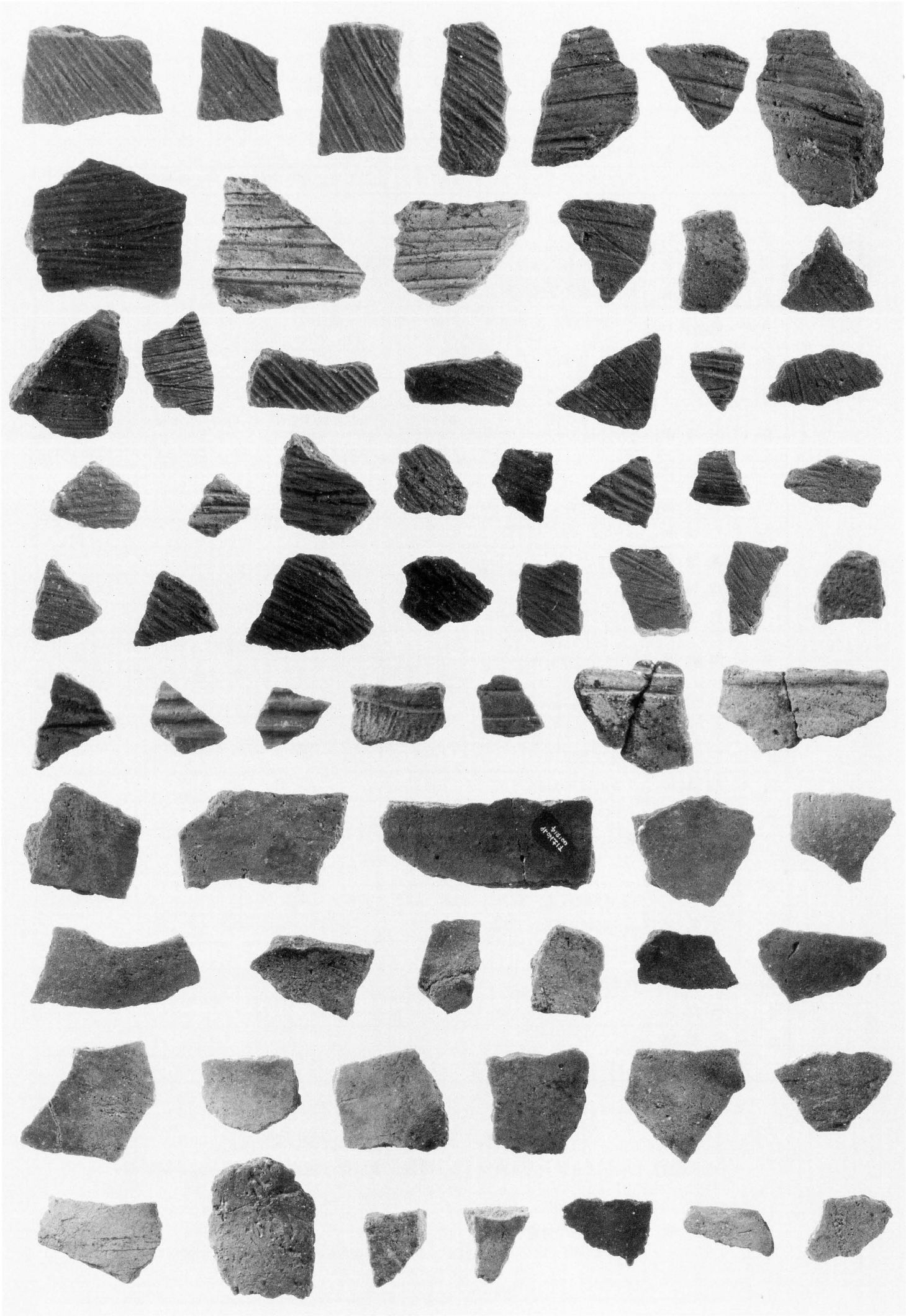
図版 4



8～32：
下反保遺跡
1号土坑
遺物

33・34：
下反保遺跡
遺物

35：
屋敷添遺跡
2号土坑
遺物



下反保遺跡 1 号土坑　出土土器（未図化資料）

深山田・下反保・屋敷添遺跡　抄録

フリガナ		ミヤマダ・シモタンボ・ヤシキゾエイセキ	
書名		深山田・下反保・屋敷添遺跡	
副題		天然ガスパイプライン（甲府ライン）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	
シリーズ		－	
著者名		櫛原功一	
発行者名		帝国石油株式会社・屋敷添遺跡等発掘調査会	
編集者名		屋敷添遺跡等発掘調査会	
住所・電話番号		〒406-0032　山梨県東八代郡石和町四日市場1566 (財)山梨文化財研究所内　TEL 055－263－6441	
印刷所		㈱エンドレス	
発行日		平成14年(2002)３月29日	
深山田遺跡		所在地	山梨県北巨摩郡明野村小笠原字屋敷の内951-4ほか(村道７号線)
		25,000分の１　地図名・位置・標高	若神子・北緯35°44′59″　東経138°26′37″・標高439m
遺跡概要	主な時代	近世	
	主な遺構	水田跡、ピット、石垣	
	主な遺物	土師器、凹石、煙管	
	特殊遺構	－	
	特殊遺物	－	
	調査期間	平成12(2000)年11月21日～11月30日	
下反保遺跡		所在地	山梨県北巨摩郡明野村上手字下反保425-3ほか(村道250号線)
		25,000分の１　地図名・位置・標高	若神子・北緯35°45′40″　東経138°26′06″・標高472m
遺跡概要	主な時代	弥生時代、近世	
	主な遺構	フラスコ状土坑1、ピット	
	主な遺物	条痕文土器	
	特殊遺構	フラスコ状土坑	
	特殊遺物	土坑内出土赤鉄鉱	
	調査期間	平成12(2000)年12月４日～12月22日	
屋敷添遺跡		所在地	山梨県北巨摩郡明野村上手字早道場1073-1ほか(村道250号線)
		25,000分の１　地図名・位置・標高	若神子・北緯35°45′31″　東経138°26′10″・標高472m
遺跡概要	主な時代	縄文時代晩期？　近世	
	主な遺構	土坑1、溝、ピット	
	主な遺物	有茎石鏃	
	特殊遺構	－	
	特殊遺物	－	
	調査期間	平成13(2001)年１月９日～１月26日	

緯度・経度は旧日本測地系数値を使用

深山田・下反保・屋敷添遺跡

—天然ガスパイプライン（甲府ライン）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成14年(2002)３月29日　発行

編　集　屋敷添遺跡等発掘調査会

〒406-0032　山梨県東八代郡石和町四日市場1566　(財)山梨文化財研究所内

印　刷　㈱エンドレス